加盟

#### 川柳核



No. 620

同人特集・私の一句

一月号



水住 高間吉 野観大 山音社



南油電鉄 | なんは641-8686 梅田311-5038

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ



#### 豚饅・焼餃

焼売・叉焼饅





TEL (641) 0551

#### 支店・出張店

なんば高島屋 心斎橋そごう 梅田阪神百貨店 天満橋松坂屋 中之島サン・ストア なんば新川店・新川売店 ドージマ地下支店 ミナミ地下虹のまち鹿鳴 京阪ショッピングモール 淀屋橋サン・ストア 近鉄百貨店 (アベノ店・上本町店・奈良店)

#### 佐 世 保

来た。老骨にも郷愁の血がたぎるのである。 う句である。青春をこの地に過ごした私の胸に、 蓮夫氏選秀逸句として載っている。「観光に一役買って『むつ』静か」 毎日新聞「まいにち川柳」に、佐世保在住の永田安親という人の句が、渡辺 のゆきこうのや、 違ったただずまいで、 港内を眺めると、 タープライズ」と「むつ」入港には騒然とした話題になった。中学校跡から 熾烈な空襲をうけた軍港の街 11月26日、 私の母校佐世保中学の創立70周年記念式典に参列した。 九十九島観光船の姿も見える。 その昔、 心なしか「むつ」も遠慮気味に繋留されている。 軍機の厳しいベールに包まれた軍港時代とは全く も、 賑わいをとり戻して平和であるが、 偶然と言おうか、 歳月の流れが痛い程伝って 30日付の 漁船

		1		
晴	八	元	妻	新
れ	+	旦	0	春
晴	年	0	干	たご
れ	慣	静	支	老
ک #:	5	は	愉	骨と
朱の	3	3	L	し
大	れ	金	<	て
盃	te	0	カゝ	0
17	ま	鈴	げ	血
M	ま	12000	b	が
れ	お	銀	な	た
る	元	0	7.7	3
幸	日	鈴	姿	る

中島生々庵

#### 川柳塔一月号



#### 歳末から 正月への随 想

#### 本

祖先の血が、この大音楽を聞いて新しい年を れは我々の身体に流れている何千年前から 銘を庶民に与えてくれる。なぜだろうか 各寺院の鐘がいっせいに響き渡る。 なかろうか。 迎える日本人的思考を確立してきたからで ベルトの名曲を聞くよりも、はるかに深い である。この大音楽はベートウベンやシュ 日の深更、越年の十五分間 感 2

と詠まれた麻生路郎先生の作品にも、 とは勿論、あの事、この事と一年の計画を樹 しく身も心も新しくして、過去を反省するこ 想がこめられており、句意の如く、万民ひと そして明くれば元 凡聖 元旦の心知る

この思

り正月に社寺へお詣りをしていない、 私事にわたって恐縮だが、私は茲三十年余 これ

である。即ち目盛りを正す月の初日だともい て、仕事や生活への修正も併せ考える日なの

1	私
	0
	句
	(i)
	人特集)
	$\widehat{32}$

雅号ぶっちゃけばなし:	「千亀利」刊行記念句会
	植山武助・
 吉	日二 野田 子
照	=
路	<u>夫</u> ::
71	53

大萬川柳「 初歩教室 ......本 計 JII 田 恵 好 選: 郎 64

各地柳壇 本社十二月句会………………… (佳句地10選 (庸佑・整理) 助 選:: :: 89 68 66

路集 紙 運毛 水 干 翁 笑 選: 選: 61 60

内

芝としよ

選:

60

93

> 掌をしている次第である。 の加護冥迦と心得、元旦の勤行に心からの合 むしろ生きがいの悦びを、あること難き神仏 決して敬神崇仏の念がおろそかな訳ではなく 俳聖芭蕉の「奥の細道」の一節に "一日存

間としてこの世に生を受けたことさえ、ある 命の悦びを味わい……』と述べているが、 にもならない有難さだと考える。 の間、生き甲斐を与えられた悦びこそ、言葉 こと難きに古来稀なりといわれる七十数年も さて、前出、路郎先生の句を披露し たので

**葭乃先生の正月句を調べてみたら** 福寿草松にしたがいそろかしこ 葭

といっても過言ではない。 られたお気持が、この一句に尽くされている の激しい気性の路郎先生に、よき妻として仕 というのがあり、 先生の句集「福寿草」の巻頭句である。 五人のお子さんにはよき母としてつとめ

させる句の一つであろう。 も推察されるが、ご夫妻共それぞれの個性を 詳かでないが、福寿草が中国から渡って来た ので、或は先生のお生れが一月だったのかと して江戸時代から目出度い草花とされてきた みに詠まれた名吟として、 「元旦草」と呼ばれており、睦月の月花と 句集の題名を「福寿草」とされたいわれ 正月毎に思い

私 座右の句 0 牛の瞳に人間何をあわてとる 夢捨てた窓 句 せきれいが来て覗く 白 岩 栞 文 衛

乃

#### 新 年所 感 中 島 生 々 庵

賀

にも一抹の不安が頭の中を横ぎるのを禁じ得ないのである。意識してか、或は無意識の裡 りの話である反面、実を言うと、われわれ老人族にとっては、何となく、現在にも、将来 言葉どおりとすれば、今に日本は仁者であふれるであろうと、新聞で読んだ。めでたい限 論語に「知者は楽しみ、仁者はいのちながし」という言葉がある由であるが、この孔子の 働いているというから、その労に対して、まことに感謝にたえないと言わざるをえない。 年間に3千万回、7歳まで生きるとすると実に22億回、昼夜をわかたず休息することなく のびたという。その裏に、人間の心臓は毎分、6回働くとすると2時間に8万6千4百回 命も急速にのびを見せ、昭和22年から30年間に男性、女性ともに、20年以上の平均寿命が は新春のご挨拶と共に、本年も宜敷ご厚諠の程お願申上げる次第である。 さて、近年、「生命の尊厳」とか、「生命の畏敬」とかしきりに言われて、日本人の寿 明けましておめでとう。旧年中いろいろとお世話になったが、お蔭で恙なく越年、

まった節目に来た時に、特にその感が深いようで、年頭の行事。初詣、書き初め、御用始 にか、何ものかにすがる心、祈る心が湧いてくる。しかも、それが、新年というような改

> 若 西 中 頌 本 尾 島 春 生々庵 多久志

栞

薫 水 風 客

正

本

菊

沢

小松園

III

村

好

郎

橘

高

る。 め、 願うからであるとしか考えられぬ。 その理由は恐らく、新しく始ったこの一年間に不幸な出来事が入り込まないように、 初釜、初夢、初荷などと特別な見方をして、何らかの意味づけをしたがるものであ

い事あるごとし」と詠んだ新年の心境も伺える気がする。 すると聞かされて居るが、西洋の諺に「始めよければ終りよし」というのがあるし、 長編小説を書く作家が、冒頭から読者を引き入れるために、最初の一行に懸命の苦心を 「千里の行も足下に始まる」の言葉もある。啄木にさえ「何となく今年はよ

あると思う。 と言う言葉もある。要すれば、徳川家康の「急ぐべからず」であり、 対に「始めよし後わるし」のケースもすくなくない。又、それほどでなくとも、 しかし、私達の人世マラソンは決して単純なものではなく、寧ろ私達の念願とは全く反 忍耐と持続と精進で 竜頭蛇尾

「用、ようように交換はつけらばって見ざい、アニビジンに気持昨年末、京都、西大谷の掲示板に次のような文章を読んだ。

だが、沈む夕日に今日一日の感謝と満足の両手を合せる事の出来る人間は幸せだ」 たどれるような人生でありたい。昇る朝日に向って一日の誓をする時に合掌する心も大切 朝、はりきって家を出かける事も大切だが、夕に充実した気持で、いそいそと家路を

まい。」という、 うと控え目なんだ。決して自己主張を押しつけたりはしないものだ」と結論に添えた。 信ある人、つまり万人からその価値と能力を認められている人というのは、どちらかと言 る。翻って私は、昨年の新年号に年頭偶感として、笹沢左保氏の言葉を借りて「本当に自 れに一年たった今年は「自惚というものが、ついぞなかったら、人生はてんで楽しくある ては、国民の政治不信を助長するだけだ」と発言をした。これも我が意を 得た 言葉 であ も大平内閣総理大臣が 拝読して、一瞬、一か年のしめくくりを訓された心持ちがした。折も折とて、いみじく ロシュ、 「できもしない約束をして国民に幻想を与え裏切るようなことをし フーコー氏の言葉が眼底に焼きついて離れない。不思議な未歳

の新年である。

常任理事 一同

運営部 一 同

句会部 一 同

編

集部

可

**-** 5 -



14

尾

栞

選

たかぶりなどはない 竹原市 11 島 蘭 幸

記憶力 雑踏のひとりひとりに新春がくる 損な男にしてしまい

ひとすじ

0 煙

洋服のセンス 愛は静かに川は静かに流れている 白髪なびかせる

新宮市 大 矢 + 郎

婚姻届け処女と書く欄見当らず

花嫁の父は一瞥されるだけ

問い詰めて知ってはならぬ事を知り 儲けてるらしいと仇のようにいう

よろめきのドラマ夫は旅に居る

松原市 史

谷

垣 好

望郷の笛を鳴らして焼芋屋

国の総理にしてははしゃぎすぎ にぴったり似合うサル芝居

赤絨緞

チンパンジー 一沫の不安へ 南天の実が赤い はまだしも躾け甲斐があ 八尾市

十二月八日そしらぬままで顔洗う

受付で渡す名刺は恥さらし パチンコ屋父に自由な椅子があり

聖人君子すこし疲れてきた背中 つじ飼いの笛を愛とは思えない

八百屋には良妻賢母で通る顔 大阪市 小 出

子

指切りをしたのも夢にしておこう ハンカチを洗うて悔を一つ消す 恋とは別に気が合うこともあるだろう

莫迦になることもタワシは知っている

凡

九郎

他人が私を私が他人を見ている眼 大阪市 神 谷

6

杉

鬼

遊

こんなに駄目な僕だったのか今頃判る 百面相でもしまひょ生きねばなりません 無心にはなれ 自分を知るなんてソリャ大変な事で ん私 人間なんだなア 桜井市 2 世 岩 木 雀踊 子.

堕ちてゆく男が忘れていた軍歌 ひざ小僧抱くとき男無職です 悔少し残る白足袋ぬぐ女 片親の育ちで少し負け嫌 あっち向いてホイ馬鹿な世間になりました 10

葉がみんな落ちて蓑虫怖くなり 倉敷市

垣

方

大

バラ色の過去だけ話す老の見栄 百点のハズご近所で嫌われる 一段の違いでふるえのくる梯子

訳を天変地異にする弱さ

H 雀

味噌汁に昨夜のもつれ解けている 人間としてど本山もいがみ合い 銀行から百円足らぬ堅いてと 神々の笑いに明けた国と言う 名も金もいらぬ楽しい旗をふる

サラ金のむごさ地獄が一つふえ 角は仏の前 いでとれ 青森市 T

藤

田

吉

0

どう抱いて寝ても結局膝は膝 善人だから悪人の餌にされ まるめろのかおりを亡妻へ買ってくる

丘に佇つ生きとし生きる風に 一丘に題 逢い

倉敷市

水

粉

Ŧ.

翁

肌寄せて北山杉は霧に濡れ 蟻の列路ぐ私も救われる 人境一如清滝川は京の音

つつがなく取り残されたなと夫婦

本

名

柳

hi . 志

人間の 老醜は罪には非ず写真帖 赤い羽根善意の街のパスポート 鳴呼平和女にやせる本が売れ ル ーツを覗く試験管

羊頭も狗肉も売らず七十年

留めどなくじわじわ応える母の計よ 八尾市

海

生

もう後へ一歩も退けぬローンの家 頭では解かっていますが村規約 母の計にそんな馬鹿なと言えるだけ

党に四 やめる動機に出会わぬ不倖 70 大阪市

Ш

III

Sn

茶

すねたわけではないが一人ぼち 顔ありややこし 6)

- 7

善人の仮面で味方から騙し 飼主とペットの派手を振りかえり 妍を競ってみてもしょせんは散る定め 責任は持てぬ私見にしておこう あきらめを積み重ねてる歳月か 覗き窓世間を防禦した砦 落葉踏むブー 竹とんぼ 神仏の国で不善がいや栄え 餌 美しく掃くには惜しい散り紅葉 世の不幸見れば不平はとんでゆき 女抱く日もなく法衣たたまれる 二三枚破れた窓から竹刀音 することもなく行くとこもなし定年の十二月 客送り出してマダムの生欠伸 キープするボトルに書いた酒の詩 努力はどうあれ結果で評価され かが道は っそりとまだ大正が居る職場 を運ぶ親鳥ノルマなど知らず 0 前職があり類冠り 曲 2 ツに感傷などはなし てない 悪童 は 一の顔となる ず自信 もち 大阪市 今治市 橿原市 倉敷市 月 岩 金 野 井 # 原 H 本蔭棒 文 省 素 小身郎 秋 明 鶴折 砂丘 秋温くし子供が拾う銀沓 波割れて巨釜半造声になる(陸中海岸 杣咀で女は女の力出す to みな半端金はかけないコレ なるほどと思わすコマーシャ 亡き妻の足袋が娘に小さすぎ 野良猫を追えば六方踏んで去り ラジョンのように人生あやつられ 朝雲が湧くよ岩手の山燃えて 去り気ない風で自分を売らんとす 不承々々三角形の握手する 進学塾脅追口調ではげまされ 老眼鏡弥陀の光に度があわず 表情を変えぬ造花が白痴めく 大学出のレッテル軽くいなされる 所 された余生へ派手な舞 さいとは云わず芸術家と云われ 真似が到 拝観砂利踏む靴は秋の音 って落葉の音を聞いてい にも生きとし生きる虫の 一々悪い 癖となり が扇 0 実 クション ・ルの嘘 3 知恵 (岩手山麓 尼崎市 人阪市 若 黒 西 長 柳 野 111 森 紫 文 花 潮

庫

村

香

花

<ul><li>玉音をワニは眠ったままで聞き</li><li>歳景の中の造花が生きている</li><li>職雲童女をひとり乗せて浮く</li><li>内尾市</li></ul>	大正に納得できぬ使い捨て大話に来て心臓が物をいうなのように取られている善意をのがある。	真向うて背なに感じぬ風を受け 市固定審委員長に選ばれて 市固定審委員長に選ばれて であれて である。 である。 である。 である。 である。 である。 である。 である。	雨もよし丹波の古寺の庭に立つ雨もよし丹波の古寺の庭に立つ 三年坂(産寧坂)京の雨には音がない 平群の里歴史の涙か雲が垂れ	二位でよしコマチネ娘らしくなり
香			河	阿
JII	1 2		村	萬
酔	弘		日	萬
々	良		満	的
妻の座が錆つきテコでも動かない は心に恥じてる動作の照れ隠し 良心に恥じてる動作の照れ隠し ないに恥じてる動作の照れ隠し	しさが才ま	然には還れぬ宴の花で 念日を幾つ作れば足る き先に橋を架けとく愛 きたに構んでみても愚 しさに弾んでみても愚	大阪市 特まれる金になりたい金の私語 特まれる金になりたい金の私語 増しみを断つ刻 星座美しい 増しみを断つ刻 星座美しい	傷口に触れるユーモアだってある
	原	島	河	嘉
		居	野	数
	独	百	君	千代

子

酒

仙

子が担ぐ御興だ黙って乗ってやる伊丹市	く琴柱の燈篭雪に耐え 長が日照権を主張する 高の雨は心に滲みてく 尾のニキビに赤い血を が消息の雨は心に滲みてく	立くならば女よ お泣き闇がある 注りの鐘鳴れば聖なる風が吹く 相剋図遺産が悪い種を撒き 相母八十路平和に暮らす数珠の艶 ソロバンを持てば貪欲な指になる 対の音楽がある がある がは がある がは がは がは がは がは がは がは がは	棚に合掌する手 他枚の絵から出会いをくさする女はライト	口紅をおとし歯科医の椅子にかけ 強がりを言っても妻にもたす舵 強がりを言っても妻にもたす舵 ・ 長男結婚
樫	JII	稲	宫'	
谷		田	西	三 西
寿	弘	亞	弥	雄
馬	生:	作	生	R
灯火親しみ眼薬買	人は人山にも 対祭り案山子 がないでも	ボーシャエー 造形展戦艦な 野ざらしのな	逆境へ耐え抜 学式日へまだ な身のいたわ を身のいたわ	気短かな夫婦に 気短かな夫婦に 気短かな夫婦に
しみ眼薬買うてくる 菊は丹精物語る	り案山子も晴着欲しかろう をはずれた魚のうずく傷 尻ゆれ見ぬかれた寡婦の貌 人山にも山の冬支度	を 中エーシャ石曳きの修羅颯爽と シもタールも抜けばさびしかろ 戦艦ヤマトも顔を出し しのわびしきものに冷蔵庫 旅情の果ての影法師 堺 市 高	へ耐え抜く意地の眼鏡拭く 日へまだ鳴り止まぬ母の鈴 へ福招ぶ窓を開け放ち へ福招ぶ窓を開け放ち けにもらす受話器が今日も来る	気短かな夫婦に金婚式が来る 島根県 錦浜 の方で今日の屋台挽く まい者の力で今日の屋台挽く
買うてくる物語る	大阪市	石曳きの <b>修</b> 羅颯爽と も抜けばさびしかろ も顔を出し きものに冷蔵庫 の影法師 堺 市	は の の の の の の の の の の の の の	うと社長になれそうで う気の夫婦 会婚式が来る 島根県
買うてくる物語る	表 う こ ね 市 西	石曳きの <b>修</b> 羅颯爽と も抜けばさびしかろ も顔を出し きものに冷蔵庫 の影法師 堺 市 高	は の の の の の の の の の の の の の	うと社長になれそうで う気の夫婦 金婚式が来る 島根県 錦

人並でよし物慾も性慾も 母の夢ふくらむばかり干歳飴 大和郡山市	神様に小出しに貰う幸でよし、神様に小出しに貰う幸でよし、雨雲よ駆けるな子らの去ぬ方へ、雨雪と腕組んで恥かしさをもたぬ	言うまいか迷った末に言わず済み人生の区切り初日へ合掌す	婚約と云う名に可愛いい薬指肌で知る世界はひとつの駅に佇ついり直す人生に愛のある支えやり直す人生に愛のある支えぎ意の輪広げて祝う屠蘇の新春	版睡していてもまさぐるパスポート 発音のミスで意外な味に遭い 権力のやかた明るく開かれて をいるがあればいでくる。 おいてはいでもまさぐるパスポート	療養の無口へ枯葉音をたて 療養の無口へ枯葉音をたて ※子市
森		堀	材	<b>k</b>	八
田		江			木
カズ		芳	珠	H H	于
I		子	村	支	代
耳鳴りは時限爆弾かも知れず、近高凛と貫く気である福寿草、強書作るほどの何かを残せしや	踏み台にされていたとはいまわかり 原案へ廻り道してたどりつき の編沙汰の年月山の街が出来 島根県	わたしが笑われますと着替えさせ 味塩でパリッとキャベツの出来を見る 兵庫県	母子寮へ噂に負けぬ母と住む地下足袋で歩く大地の温かさ地下足袋で歩く大地の温かさったのも知らず	かい子供が頼りないが朝の床で知るが朝の床で知る	ごと秋の実りと一緒に来学と云うた昔をなつかし
	小	遠		濱	児
	砂	Ш		野	島
	白	可		奇	与
	红	住		童	与呂志

商況好転せず山に雪をみる に認り重点火期を狙う に認り重点火期を狙う に認り重点火期を狙う に表を結ぶ に表のを言う唇寒し父権の座 にである。 に表しいの芽生えて永久に実を結ぶ にである。 に表しいの芽生えて永久に実を結ぶ にである。 に表しいの子生えて永久に実を結ぶ にである。 に表しいの子生えて永久に実を結ぶ にである。 に対している。 にがしている。 にがしない。 にがしない。 にがしない。 にがしない。 にがしない。 にがしない。 にがしない。 にがしない。 に	<ul><li>事</li><li>高</li><li>局</li><li>有</li><li>方</li></ul>	塚市 傍 島 静	中の良い夫婦はいつも騙し合う 水尾市 大路 美幸 さば寿司を食べると聞える祭り笛 耐え抜いた過去が笑顔につきまとう 親類の笑顔が恐いときもある でした はいに風が吹く	ジーパンに締めあげられているおんな
シングへの復せるオーガンが対くカレンダー一枚今年も無事にすみ歳月がいつしか耐えることに慣れ初詣撮されている顔意識する	で びょうけんだ こればなれず風化もさけず生家にはまだ孫がないあせり家にはまだ孫がないあせりですらしが笑っている握手面どうしが笑っている握手	空働く人の詩があり、この癖が抜けない。要は具にも流行があり、この癖が抜けない。	子が走るレールよ錆びること勿れ ちぎれ雲君にも古里あったのか 亡父想え亡母を想えと彼岸花 信じたい信じられないままの距離	大阪市
若	藤	北	恒	江
宮	村	山	松	城
武	R	越	叮	修
雄	女	Щ	紅	史

音絶えて哀しきままに慣れし日々 松原市 北 野 久 子	聴えないから夫婦の話底がない寄りそうて夫婦に演技などいらず	孫ひとりひとりが宴盛上げる		夫へ娘へ還暦の今日素直	大阪市 柳 原 静 香	愛情を不況へこわされまいとする	女だけ働く島の海きれい	さみしさに負けぬおんなの傷深い	洗い髪おんなのすきが見えてくる	彩変えておんなころころ嘘を言う	今治市 越 智 一 水	一日に婚礼二つ日短か	一寸ずつ自分の正体見えて老い	史書百巻時の流れがあるばかり	仔羊の無心な耳に春の風	仔羊の蹄に草のやわらかさ	豊中市 安 藤 寿美子	枯葉さえ忙しそうに舞う師走	ながらえる恥に限りのない造花	土壇場の平気な阿呆に負けそうで	道化師のトチリは誰も気付かない	ガラクタにすると動いた古時計
	東大阪市 市 場 没食子茶柱の嘘つき一万四千円落したり	初日の迷い千秋楽まで来てしまい	通話料とっちが持ってのろけ聞く	自殺未遂そんなペンだと抱いて生き	降りて行くあの落下傘開らくかナ	大阪市 不二田 一三夫	新年の羊に抱負などはない	一日でもう正月を退屈す	病中の思い出妙に懐かしい	デパートもうすうすニセを知っていた	アーウーの大平さんにゃ噛みつけぬ	大阪市 大 坂 形	汽車に乗る雪は北国白くする	母と来る約束山は白くなる	父と逢う峰は白くて父となる	母になる樹が欲しくなる白い峰	自首をする男が登る白い山	富田林市 板 尾 岳	秋を着る針の運びもリズミカル	自愛とはすらすら書けて出来ぬもの	聴えたら声をかけたい人に遇う	聾と言う因果に耐えて五度の秋

#### 池上本門寺参

街ぐるみ沸く講中のお練り (柴又帝釈天にて) 連

お 産のせんべいに渥美清の 顔

西市 戸 古 方

拾うては捨て捨てては拾うてみる落葉 **忰かんだまま生きている生かされている** 

嬉

しい日うれし

い事が手に余り

島根県

堀

ŽΤ.

IE.

朗

アイオリンだけがとても気になる辻久子 藤井寺市

1) わを 孤独性人人人のなかにいて

懇談をするに一人は煙草いる 山荘の枯葉に人の気配なく

退屈をしたとお通夜では云えず 五右衛門の科白が今に生きている

竹原市 Ш 内 静 水

思想とは別にもらっておく色紙 傷なめてなめてライバル倒れない

父性愛妻の涙に及ばざり

あんた男でしょうと女は三人

和歌山市

野

林

太茂津

娘

便り机上に菊を溢れ

しめ

宅

不

朽

初日の問 除夜の鐘余韻がこもる陶冶の詩 に立つ身を晒す初日の 出旅へ歓喜を鏤める を無心に戻す初日の出 出

島根県 藤 井 明

朗

連神 休は日曜大工待ってい の鈴みな良縁に結ばれ る 3

ビル無気味な夜の幕が降り

石けんで洗って嘘のない体 子には子の歩巾があって遠ざかり 音ひとつせぬとき指をもて遊ぶ

欠席の嘘考えながら歯を磨く 鳥取市

11

林

由多香

下駄箱へ足ぐせ残す亡父の下駄 腕を組む父へ家中ぶらさがり スト続く駅舎へすずめ来て遊ぶ

神戸 市 H ゆきを

王妃より優れり農婦の太い指 あせるまい某日メガネ替えてみる 休日のオフィ ス電話が気味悪い 宇宙人かも知れぬ瞳

知恵おくれ

旬も地味咲くも散るにも紫蘇の地 出の車窓へ野暮なイヤリング

ひとを恋い訪ねし羅漢もひとを恋い 味

玉 弘 \* 休 開運の縁起かついで新春の街

-14-

院教機快調手話となる夫婦 割箸にまっすぐ割れぬ性があり 割をまっすぐ割れぬ性があり	成り年を喜ぶ里の柿のれん 成り年を喜ぶ里の柿のれん ではの実もわたしに似たか寒がりや ではの実もわたしに似たか寒がりや	耐え難しもう限界という仕草 山っけを出したとたんにまたとちる 全身で喜びぶつける障害児 島根県 榊	大阪市河	田では 田でかいて関節が笑いだし 田であいて関節が笑いだし 田である者屋敷でからくられ 田である。 田でる。
津	上	原	井	崎
柳	春	秀	庸	祥
慶	巳	子	佑	月
死ぬまで、	相愛のとうだ	財保母されている。	お直ツ裏の東	冗手母妻 添
死ぬまでプラスアルファーないままか馬鹿にて候下に正直がついてますが入ると神輿が軽くなり	相愛の夫婦にサラ金割って入る食欲と別に時間で三度食う。機を別に時間で三度食うなとうちゃん向うむいてておなら出る喋るだけしゃべり補聴器を外す	財を成す手相はいらぬ鍬を振り保母さんの前で保父さんへよく懐き煮凍りの好きでまだまだ父達者	お客様は善人ですと無人駅で、とする要の裏読んで只酒遠慮せず	一定では 一定の 一次の 無理ハイハイと聞いてやり では が を の無理ハイハイと聞いてやり で の に の の に の の に る に る に る に る に る に る に る に 。 に 。 に 。 に る に 。 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に に 。 に 。 に 。 に 。
フがくい	夫婦にサラ金割って入る とないの がいてておなら出る けしゃべり補聴器を外す	いらぬ鍬を振りれる。ないののないでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これ	ほ	も小さくなり が馳けつける いイハイと聞いてやり
ファーないままか がついてます かったます	り補聴器を外すで三度食う を割って入る を割って入る	保父さんへよく懐き 保父さんへよく懐き ながを振り 枚方市	松江市	して来る恢復期 いイハイと聞いて いて来る恢復期
ファーないままか の	ラ金割って入るで三度食う 松江市 柳	は 保父さんへよく懐き 保父さんへよく懐き な方市 宮	松江市 小	も小さくなり が馳けつける いイハイと聞いてやり

 松江市中川晃	吊橋に訪れもなく滝涸れる	碁会所へ通う生甲斐羨やまれ	救急車二台続いた人の垣	新米の味米審へ届けたし	平田市 久 家 代	社宅の子流石知ってる労働歌	通夜の膳子は悲しくも石を噛み	お借りする軒の奥から酢が匂い	よばよぼの恋を中年悲壮がり	岡山県 出 原 敬	後ろにもついていたのか巡査の目	神経が鈍りだしたか蝿たたき	結論は駄目でもともと言うてみる	入念に矯めて射たのに的をそれ	笠岡市 松 本 忠	泣き顔もうつして或る日の自動ドア	もう一度修正 老の青写真	低すぎる腰を卑屈とも取られ	亡き人の夢見てからが寝つかれず	守口市 野 呂 右	紅一点もう少女の瞳では無い	騙されて見たい夜空がきれい過ぎ	水割りに女の嘘も聞いてやり	喋りつかれた雀へ秋の陽が落ちる
男					仕男										Ξ.					近				
羽曳野市 塩	睡蓮の眠りへ堀端騒がしい 東本願寺	おのれで働こうとはしない自動巻	痩せてゆく月に願いごと見合わせる	あの時はあれしかなかった俺の道	京都市都	明日を信じて手さぐりの五十年	私から抜け出して私を見つめ	水の中に居て水を知らない魚であり	カビ生えた自分の穴を大事がり	大阪市一天	美しい遺書など書ける筈がない	着流しが似合う男の無策な手	落ちこぼれの虫懸命に秋を鳴く	秘密持つ楽しさがある絹の音	富田林市 岩	泣いている彼女玉葱の中に居る	大学でさて役に立つ麻雀史	その昔目印だった石仏	叙勲遠く忘れた友から便り来る	唐津市 新	玉砂利を下駄に挟んで初詣	家族みな揃うて先祖に初明り	突っかけを飛石に脱ぎ急な用	命果つる今はに紅葉燃えさかり
	蓮の眠りへ堀端騒がしい東本願	のれで働とうとはしない自動	てゆく月に願	の時はあれしかなかった俺の	Щ	日を信じて手さぐりの五十	私から抜け出して私を見つめ	中に居て水を知らない魚であ	ビ生えた自分の穴を大事が		しい遺書など書ける筈がな	しが似合う男の無策	ばれの虫懸命に秋を鳴	密持つ楽しさがある絹の	田林市	いている彼女玉葱の	つ麻雀	った石	勲遠く忘れた友から便り	津市	砂利を下駄に挟ん	みな揃うて先祖に初明	っかけを飛石	果つる今はに紅葉燃えさか
塩	蓮の眠りへ堀端騒がしい東本願	のれで働とうとはしない自動	てゆく月に願	の時はあれしかなかった俺の	都	日を信じて手さぐりの五十	私から抜け出して私を見つめ	中に居て水を知らない魚であ	ビ生えた自分の穴を大事が	天	しい遺書など書ける筈がな	しが似合う男の無策	ばれの虫懸命に秋を鳴	密持つ楽しさがある絹の	田林市 岩	いている彼女玉葱の	つ麻雀	った石	勲遠く忘れた友から便り	津市新	砂利を下駄に挟ん	みな揃うて先祖に初明	っかけを飛石	果つる今はに紅葉燃えさか

帝麗ごとならべてしやっくりして帰え、 意地で継ぐ勘亭流に筆の冴え 天国の夢見ながらに死ぬ趣向	がきが	破れ土塀にピント合わすも京の秋 学られたシルバシートへ浅くかけ 学校の想い出老友と温める 京都市 幸せな老後素直な嫁が居て 京都市	東大阪市 安産のお守り腹の孫に買う 振り出しへ又まいもどる捜査室 振り出しへ又まいもどる捜査室	兵庫県 華道展枯木に花が咲いており 華道展枯木に花が咲いており がスレンジことにもあった火の歴史
森り	福	松	落	大
井	浦	JII	合	江
菁	勝	杜	思	秋
居	晴	的	月	月
退職金娘の支度に持ってかれ うどんなと食べよと大阪へ妻と来る うどんなと食べよと大阪へ妻と来る 政策にすまないけれど米の出来	ſ	職尾ひとつ炎えて夕陽は寺に落ち(唐招提寺) の場尾ひとつ炎えて夕陽は寺に落ち(唐招提寺) の場尾ひとつ炎えて夕陽は寺に落ち(唐招提寺)	見すてない重さで紙幣を大事がり 見すてない重さで紙幣を大事がり	路地裏で迷い人間味に出会う 即答をしない女で好きになる かは無常とおもいたくない菊見酒
	I .	幡	林	端
笛	í	里	草	柳

風

右

生

子

	大川座を作る茶の間の灯原みのる送憶などと少しお金がほしいだけが円座を作る茶の間の灯送憶などと少しお金がほしいだけが円座を作る茶の間の灯	野心などさらりと捨てて風渡る 島根県 栂 みどり こ枚舌隠す電卓音がない 二枚舌隠す電卓音がない 二枚舌隠す電卓音がない 二枚舌隠す電卓音がない 二枚舌隠する峰茶漬け	また一つ罪を重ねる紅をひく 島根県 大 森 孝 華 つまずいて養生訓を読んでいる 短いとうの でいる でいる でいる でいる でいる でいる でいる いんした をおいる はいる はいる はいる とと子の笑い話にも夢が住む その群追うて牧場陽が落ちる 愛の岐路女は母を捨て切れず	米の飯拝んだ時代なつかしむ	高槻市 福田丁路 鳥取県川崎
	1000	200	CONTRACTOR OF	III	
	林	斎	玉	和	JII
握り	市林	於市	松原市	田舞 す 市 和	JII

三カ日だけ 大和民族	言うことはない 元日の膳	百年戻す 絵図も元日	變
			愛媛県
			渡
			辺
			暁
			童
好きだから海が私に喋り出す	背伸びもう無理だと知ってからゆとり	隙だらけだから用心して来ない	竹原市 時 広 一

路

海鉛竜 不					
ļ.					
東大阪市	散ることを忘れて花の真っ盛り	好きだから海が私に喋り出す	背伸びもう無理だと知ってからゆとり	隙だらけだから用心して来ない	
亇					
1					
夌					

	甩				
	不				
	酔				
正倉院の御物千年前を今に彩ゆきずりの白髪の人に亡夫浮ぶ	東大阪市	散ることを忘れて花の真っ盛り	好きだから海が私に喋り出す	背伸びもう無理だと知ってからゆとり	隊たらけたから 用心して 来ない
	竹				
	中				
	綾				

女

倖は福寿重ねて古稀の春

(自祝)

市

大阪市	もう少し先にしてんかお正月	無事な日の日記は音を立てて閉ず	プラスマイナスゼロとなる術聞いてい	思い出が削られ丘に家が建ち	和歌山市	干魃に台風待ちの得手勝手	立冬にこおろぎの声たえだえに	正倉院の御物千年前を今に彩	ゆきずりの白髪の人に亡夫浮ぶ
至			3		津				
谷					田				
至谷散					与				
舟					史				

舟	徹	谷	室	大阪市
				う少し先にしてんかお正月
				無事な日の日記は音を立てて閉ず
			3	ノラスマイナスゼロとなる術聞いている

T I	5	7	往	f	
と南京錠が云っている					
となし瀞峡生き続け					
(字叶えてくれた初詣で					

核心に触れると女 廻り道して名案を想いつき 太陽を拝めば倖せ湧 11 話題替え てくる

真似できぬ厳しさばかり立志伝 青年の拳古さへ妥協せず 妻子が笑う僕が笑う平和な夜

羊を生み雌羊が売られゆく

亡夫の碑に添えた私の名が燃える 七回忌の亡夫に見せたい着物着る

まだ若い鏡の顔へ自答する

呉

市

槙

Ш

英

詩

絵馬の文 静かなる 岩動くと 留守です

真心に触れ

て容疑者

ししやべり出

和歌山市

内

誰に似たこの孫美人になりそうな

予感的中そんな悪夢は老母に伏せ 呵々大笑そんな男に策がない

寝屋川市

宮

尾

あ

1)

#

皿が乾いてカッパ思案に行き詰まる

女です女の罠をもう見抜く

ジャンケンに勝ったり負けたり孫の守

つるつるに禿げているのに代理席

鳥取市

面

洋

4

横断に犬さえ左右見て渡

n

薄情なようじやが病名知らず

大阪市 藤 頂 留子

肩と肩 よせて楽 T 6 廻 しり道

地下 お下りも借着もあって七五三 街を出れば無情なにわか B

なぜ急ぐ冥土はそんなに住みよいか

和歌山市 吉 耶 子

釣り合いを合わす姑苦労性 -街第二の故郷として誇る の取れぬレベルをうとんじる

鳥取市

有

時差ばけと外国ぼけの旅終る

流れ星燃ゆる刹那が美し

茶柱はうれしい心を知っている 正常の鼓動と知った子の寝息

不運にもレンズに頼る狭い視野

和歌山

Th

垂

#

Ŧ

寿子

残された人生 年令が選 送った道

子育ての道 十字架が重くな い

亡姑の帯記憶の橋をかけるごと 天高く流れ作業の華燭の

掌の中へ還えす涙に嘘がある 和歌山市

松

原

弄

子

熱い瞳に胸の崩れを支えられ秘めている言葉は濡れた唇びるに

触れた掌に愛の鼓動が澄んでいる

寒風 衣食住足りて不縁の思 へ今日も無言 0 赤 しいやり 電 話

振り向かぬ誓いへ土足で入りたが がむしやらの前進だった夜の長さ 1

喝采の過去は語らぬピエロです

国道が廃道にしたススキみち 吾が城を継ぐ長男の船に乗る

文化勲章明治を忘る事なかれ

権力笠に着て端をへこませる

座を外してから盛んに出るクシャミ

妾宅では尻こそばゆい夫婦箸 三方五湖にて

それぞれの湖はやさしい貌をもち

宇部市

立

実

男

政治 三尺の自由で一生終る犬 へは選挙の馬力を出していず

三尺進んで師の頰を打つ

自動ドアみたいな男で平のまま

班長になって宿題して来だし 先生と視線が合うて当りそう オーブン 1 ア ブックスその日その 山県 日の声 É の艶 岩 文

衛

大阪市 津 守 枷

信

市 大 塚

生

取

西 III

大阪市

- 20

1:
フレ
4
去
Ĭ.
1
11
0
頃
から
あ
2
た
は
-Ja
9

鳥取市 佐 々木 静 泉

婚三日目娘に何を言わんとす

子等叱る基準は俺の子に置いて 筋書きが決まりゆっくり休もうよ 順風満帆では ない銀婚へこぎつける

米子市 石 垣 花 子

陰口 滑らかな口で他人の胸を刺し 年来の友が負う深手

古文書へ学者しぶしぶ説を変え 停年にまだ一人居るすねかじり

練早市

原

明

春

お言葉に甘え箒を立てられ 電車腕のところにある乳房

満員 事故ゼロの誓い歩道橋息が切れ たまに行く釣を予報がさからう気

大阪市 本 間 満 津 子

ばあちゃんの大阪弁に訳がいり 子育でのひと節ごとに神詣

火事見舞い保険の額を聞きたがり B ボチョ ボのくらしで友情変らない

瓶 むし胸の鉛が溶けてゆく 寝屋川市

柴

 $\mathbb{H}$ 

裏付けがないと強者にようならず 着換えさせながらポケット検査する

十二月聖しこの夜まだ残り

鳥取県 金

III

満

春

のセ 1 ルスの棒グラフ

莫迦になる日もあり母の座がまるい 莫迦になる日 ボーナスに関わりもなし脱穀機

名作 0 壷 が私語するガラス張り

贄沢な米の味まで忘れさせ

石の貌見つめて庭師腕を組

to

玉野市

11

谷

仙

Щ

四人目も婦人科お目出度と言 父に無い風は母から吹いて来る 10

何とのう気使う裏の向 い合わせ 雨

花折るのかんにんかんにんと甘 さて何処へ行こうか京の宵時 文の助茶屋

千客万来風邪が治らない 母の鈴非常出口 につけてある

痩せるため食欲とは平和なり 家事手伝いなどない娘のスケジ 2 1

ル

生ぬるい言葉を捨てる曲り角 本心と違う台詞が見つからぬ 歌山

見 茂 美

市

伏

大阪市

酒

屋

京の四季そこだけ歌う長楽寺

神 道 子

幸

市

西

Ш

<ul><li>遠い若夫婦</li><li>遠い若夫婦</li></ul>	バーゲンで買ったシャツ着てお元日 日曜の底に沈んだ咳払い 日曜の底に沈んだ咳払い 松山市 谷	手作りが受ける温さに飢えている 自分だけいい子になれぬやじろべえ 自分だけいい子になれぬやじろべえ	を 経属に引く 幕色を考える 経属が降りてピエロの眼がひかり を を を を を を を を を を を を を	自問自答の指に屑糸絡みつく 鳥取県 林
П	6	末	原	
	真面	-	桜	露
度	め風	灯	Щ	杖
食慾の秋へ抵 年金と秤りに 半分はわかっ	たてがみを靡 たてがみを靡	を を を を を を を を を を を を を を	座敷まで 皆勤賞只 と 財を閉じ	弁解の舌
は寝ていたポルノ映画出る と秤りにかけている余命 を空振りさせて笹を食べ 姫路市 はわかったような社長訓	がみを靡かせアクション歌手の歌で理由を赤札知って居るで理由を赤札知って居るで理由を赤札知って居るではみ	を を を を を の の の で の で の で の で の で の で の で の で の で の で の で の で の で の で の で の で の で の の で の の の の の の の の の の の の の	座敷まで入る陽差しへ爪を切る 皆勤賞只それだけの足の跡 皆動賞只それだけの足の跡 見を聞いて開らけば見える闇の中	の舌から責任ころげおちんだ方が大声はりあげる
たポルノ映画出る たポルノ映画出る たような社長訓	かせアクション歌手のがせアクション歌手の神戸がも似合う柄ばかりでも似合う柄ばかりでもなみがしなみがしなみがしなみがしなみができない。	気が軽い 高槻	が の跡 の跡 息	とろげおち 大阪
<ul><li>たポルノ映画出る</li><li>たポルノ映画出る</li></ul>	<ul><li>かせアクション歌手の歌</li><li>かせアクション歌手の歌</li><li>かせアクション歌手の歌</li></ul>	気が軽い 高槻市	爪を切る 鳥取県	とろげおち 大阪市
<ul><li>たポルノ映画出る</li><li>たポルノ映画出る</li></ul>	かせアクション歌手の歌がせアクション歌手の歌神戸市が要服の身だしなみ神戸市	気が軽い 高槻市	爪を切る 鳥取県 鈴	とろげおち 大阪市

ドド 靴暮てて といよ児 況僕りル	馬券持つ風情しがない野球帽 風見鶏明日雨降る方を見る 種なしの果実や業の深きもの で学友なよなよしてたとは云わず がで学友なよなよしてたとは云わず 基本しの果実や業の深きもの 東本でであるけくれ思うまいことか
原東県か給油か君と僕の酒 の心を読んでいる の心を読んでいる 知らぬ存ぜぬ空が澄み 知らぬ存ぜぬ空が澄み 知らぬ存ぜぬ空が澄み し元気な老二人 し元気な老二人 し元気な老二人 し元気な老二人 しの邪魔になる落ち目 が揃って灯が点り しの邪魔になる落ち目 が揃って灯が点り かんも車も泳いでる の人も車も泳いでる	り派手なのぼりを押し立てて り派手なのぼりを押し立てて 明日雨降る方を見る 東京都 の果実や業の深きもの 東京都
桑 飯 川 清	叮
原塚村水	根
道 虎 映 一	白
夫 秋 輝 保	星
でこまでも続く車の日暮れどこまでも続く車の日暮れがすれば持って死ぬ気と (検約すれば持って死ぬ気と 検約すれば持って死ぬ気と が守る妻に白旗持たさない 石積んで罪の深さをじっと を応してる声が窓から零れそ ふるさとへ帰える木の葉が をあるさとへ帰える木の葉が でニキュアを落とし女の物 でによるのとの物	か針の廻る早さについて や針の廻る早さについて をとなれば友情口先だっ 金となれば友情口先だっ 金となれば友情口先だっ
はいる はいる でとまでも続く車の日暮れ時 が成かり集めて私の佗び住居 が成立 であれる息をひそめて春を待つ 使約すれば持って死ぬ気と子が笑う 使約すれば持って死ぬ気と子が笑う 使約すれば持って死ぬ気と子が笑う をあるさとへ帰える木の葉が風に舞い なるさとへ帰える木の葉が風に舞い なるさとへ帰える木の葉が風に舞い なるさとへ帰える木の葉が風に舞い なるさとへ帰える木の葉が風に舞い なるさとへ帰える木の葉が風に舞い なるさとへ帰える木の葉が風に舞い なるさとへ帰える木の葉が風に舞い なるさとへ帰える木の葉が風に舞い なるさとへ帰える木の葉が風に舞い なるさとへ帰える木の葉が風に舞い なるさとへ帰える木の葉が風に舞い なるさとへ帰える木の葉が風に舞い なるさとへ帰える木の葉が風に舞い なるさとへ帰える木の葉が風に舞い なるさとへ帰える木の葉が風に舞い なるさとへ帰える木の葉が風に舞い なるさとへ帰える木の葉が風に舞い なるさとし女の物思い が原市	か針の廻る早さについてけず か針の廻る早さについてけず か針の廻る早さについてけず か針の廻る早さについてけず
返話 思 風う 鳥い見 子待居時 がつ	けず ならず

茂

雄

千代

蘭

かつ子

節

夫

<b>老人の無料が病室占領する</b>	大阪市	コンベアーのようなツアーの旅たのし	美しく老いたし心の本を読む	スキップが胸のはずみを伝えてる	岡山県	人間の盲点 道を踏みはずす	残業の蟻同士平均台にいる	ここから出発の春 地平線へ	柏原市	石仏顔の笑いにある世代	一番に走る子のシャツ破れて居	嘘を言いお世辞も云えて女将の座	七尾市	新免許バックミラーが肩凝らし	ライターの音して男の夜が明け	札束の魅力手にとり確める	姫路市	あてどもなき老いの足	売る嘘を飾り立て	労りで癌と知り	岡山県	泣く馬鹿があるかと友も泣いている	ふるさとは貰いに行くとこ泣くところ	
	神				竹				大				松				大				直			
	田				内				峠				高				原				原			
	秀				翁				可				秀				葉				七面			
	峰				童				動				峰				香				Ш			
鈍行の窓は紅 無人駅	石仏あって近代化に遅れ	倉敷市 斎	揺れ動く心を指に見すかされ	ミニサボテン一握りの砂に生き	日記にも書けぬ色香もほしい年	岸和田市 島	炎えることなくなり足を丸めて寝	一杯のふれ合い私を見つけ出し	自からをいじめて初心の鬼になり	鳥取市 岸	先生を見る思春期の瞳に出合う	一冊のポルノとコインランドリー	銭箱のハエは追わない魚市場	奈良県 松	泣きながら母は見ている母子もの	無理矢理に出たが夜道が怖くなり	固い事云って新語に乗り後れ	三重県 坪	女或る日がんじがら目になる不安	一線を引けば理性がくずれかけ	拗ねて居る女妥協の背を見せる	大阪市 黒	閑と金持てば持ったでまたばやき	
		藤				崎				本				田				田				田		
		通				富士				無				宇忠				冬				真		
		風				富志子				人				宇宙太				花				砂		

月の娘へ母の落ち着か国の香りいっぱいりんる日を孫が待ってる旅	貧しさがいつまで続く秒針よ 朝の霧やがて働く音となり 再宮市 手紙書くきようの若さの中で書く つるし柿里の秋日は早や落ちる でまそのままの中で書く	展在がさめず煙草に火がつかず 関番がさめず煙草に火がつかず 島根県 原族振る男の考え聞きもらし 島根県	勝ち目ないけんかは大きな声で泣く一粒の砂利にも石としての自負一粒の砂利にも石としての自負	「又来ます」何故か哀しい女坂白萩のひそとこぼれぬ無縁墓地在たちのささやき聞いて今日も無事
吉 清	杉	西福	崎	土
田 野	浦	村田	川	岐
笑 こ	婦主	早 保	美	١ /
女 う	美子	苗   子	子	ク子
山湖抱き白樺雪と白競う 大人峡から然別朝へ(北海道) 東土林色づき湖面雪になる 原生林色づき湖面雪になる 原生林色でき湖面雪になる		では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、	の名を聞けば地酒と宿自慢 川 の名を聞けば地酒と宿自慢	たる を
Z	k:		村	後
Z	k	緑ク	好	実
3	军	之助	郎	男

風まんじ落葉に行く手さえぎられ

伝説 腕組んで迎春の辞を何んと書 あるもの あざやかな椿の紅 の中に祖先の思慕をおく をあるがままにと霙降る 15 置を述 ~ る

> 伊 藤 茶 14

謹

智

新

年

111

柳

塔

社

浜

本 恵

月雪

花と遊ぶ余生を子に貰

60

母:

孤

に耐えているとは見せぬのも男が動くと風まるくなり甘くなり

年賀

状の束がわが家を賑やかす

お正月妻のゆとりをふと感じ

古稀が来た初春

しみじみと屠蘇

0 味 り来る新春へ心の蔭がなし

燈明を上

げ

一年の計を告げ

の世

からあの世とやらへお人好し

せっ

かちの首は振りこの虎に似る

の子だ風の子だ泥んこだ

朗

削られて以来丘には虹立たず

悪筆も墨痕淋漓年賀状

初明り秘仏開扉もかくやあらん

一度目

の正直もまた勝

ちませよ

橘

高

薫

風

、田知事

初暦三百六十五のモザ イク

岩 本

多久志

栞

西

尾

三人が

緒悲劇

の始めなり

世して戻る世間

に鬼は

ないい

かたつ

むり

の歩いた道を笑えない

のそこから鶏引き返し

着流しが力仕事に口

一を出

境内の銀

香見上

げる竹箒

銀香落葉踏めば黄色に染まりそう

惚れら

n

ていると両方とも思

1

裾さばき祇園囃子を背に聞

3

親

0

眼に女が悪いと決めてい

3

菊

沢

11

松園

不況

不況俺が総

理になったろか

故郷をもたぬ男のお正月

ペン採れば意見がましきことばかり

痩せたい妻

肥えたい夫共に病み

横

綱

0

背中

VC

ついた砂

寂

- 26 -

# 川柳太平記(8)

# 川柳雑俳の始まり

東野大八

になった。

制約の厳しい紙幅で、筆者は及ばなずがら根潜なるものの骨格を一応描くことに努めたが、長大無辺の俳諧史からみれば九牛の一毛が、長大無辺の俳諧史からみれば九牛の一毛に過ぎない。本稿にこれから述べる前句史にに過ぎない。本稿にこれから述べる前句史においても、//愚公山を移す//の一本のつるはおいても、//愚公山を移す//の一本のつるはおいても、//愚公山を移す//の一本のつるはおいても、//愚公山を移す//の一本のつるはおいても、//愚公山を移す//の一本のつるはおいても、//歌という。

句は発句であり、川柳は前句付、または単には、明治に入ってからである。それまでは俳俳句も川柳も、その呼称が世に定着したの

た。 付句ということで文献上でも 処理 され てき

向付というのは課題で、付句というのは答談である。前句即ち題に対し、付句即ち答を談である。前句即ち題に対し、付句即ち答を対し脇を付け、それから第三、第四と歌仙の対し脇を付け、それから第三、第四と歌仙の三十六、またはそのほか五十の百のとつける原を避けて、前句一に対し付句一で終って、しかもその間に俳味を味わうというのが、前し付即ち川柳なのである。

ろまりはじめた江戸期よりもはるかなる以前ろまりはじめた江戸期よりもはるかなる以前

どは世ぬ事なり。かなともべしとも、また春「発句は必ずいい切るべし。何には何をな

最もこの頃、こうはいっても、発句酸秋の風など体にすべし」(八雲抄)

でいなかった。 最もこの頃、こうはいっても、発句は一詩 形として独立したものとは全然考えられず、 形として独立したものとは全然考えられず、

一一木さく花には散らぬ心かな 尊氏 一一木さく花には散らぬ心かな りま こんな武人の句が残っているが、連歌の第 こんな武人の句が残っているが、連歌の第 こんな武人の句が残った。ところがこの体いため、そのままで残った。ところがこの体いため、そのままで残った。ところがこの体いため、そのままで残った。ところがこの体が、発句(のちの俳句)の元祖だと筆者は考えている。

一方、前句付、一名付句の方はそもそもいつ方、前句付、一名付句の方はそもそもいい頃から始ったものか、川柳研究関連の各学設好編(元禄九年―一六九六)大坂雁金屋扱良好編(元禄九年―一六九六)大坂雁金屋扱はでいる。少々長いが重要文献につき主要個げている。少々長いが重要文献につき主要個がでいる。少々長いが重要文献につき主要個がでいる。

らじ、われ暗愚の身ながら若年より此道に執たるように書かれける草紙あり、全くさにあたるように書かれける草紙あり、全くさにありが出りがより始まり

りて、和州の清書を始めけり。 付という事を始められたり、四季の句に恋に 是を興有る事に思い、同じく成之の前句を取 る能書有りし、此人成之の句を取初めて六句 河州小山村に日暮氏とやらん重與と名乗りた 泉州堺に池嶋氏成之という好士ありし、其頃 や過ぎぬらん去る万治年中(一六五八→)に 友是を楽しめり、これぞ此道の最初なる、予 め褒美という事もなく巻勝にして、河州の俳 ても名所の句にても加えて六句に拾銅づつ集 心ありて、この起りは知れり。星霜二た昔も

句を初めて取下し六句付を仕次がれたり、そ 致されよう脇書讃等に至るまで、しどろもど の頃未だ京都に沙汰も無之時節なれば、点の 江戸も諸国ともこの道盛んになりぬ」 ろにて初心成し也、それよりして京も大坂も なる有りし也、京二条の住高瀬氏梅盛公の前 次に和州下田村に葦葉という法師此道に妙

の付合修練の場であったことを物語っ た前句に六句をつける形式が前句付で、俳諧 右に出てくる「六句付」とは、宗匠の出し まだ続いているが、この辺で宜しかろう。 この方法は貞門派の流儀らしい。 てい

内で起ったことになるが、菊岡沾涼は 以上からすると、前句付は、万治年間に河 「明歴

> 当らない以上、どうにもならない。 ら、前句付は京、大坂付近で既に流行の兆し で五句付をやったという記録もあるところか まったようにも思われない。貞門系似船も京 当るから、何も河内地方だけで前句付がはじ 六五六)といえば、談林俳諧が旗上げの年に 二年に上梓された『花月集』が、前句付の始 にしても、前句付史上、確たる文献が他に見 をみせていたことは十分察せられる。いずれ め」という文書を残している。明歴二年

佳境の全盛期を迎えた。元禄二年俳諧苗代木 の松」など二、三種しか出ていない。 ったという。これに対し江戸では「俳諧二葉 その俳諧雑俳本はほとんどが横綴りの小本だ 本が氾濫している。京、大坂方面が中心で、 を口火に、同十七年までに三十種近い前句付 とにかく元禄の世に入ると、前句付は俄然

と厳重な警告を発しており、やがてのちには だためで、ついに元禄十年には、江戸幕府は りは、一重に景物取り(懸賞)が人気を呼ん ことが、前句付(のちの川柳点)に句主を表 厳しい禁令を断行することになる。こうした そもそもこうした元禄期の前句付の殷盛ぶ 帰するところ賭博の勝負に相似たり

> うれしや うれしや 物かくしたる朝顔の よい時分起しませうと膝枕 恋死の仔細あるべき嵯峨の露 垣 来山点 西鶴点

ぬらりくらりと

俳本の刊行のしようけつぶりを呼んだ訳だ。 二句付となして諸人勝負を争い……云々。 や。「俳諧高天鷺」(上述)にもまた言う。 どの俗諺が、前句付の出題に出るにおいてお よらぬことであった。しかも、貞門のいう重 には最も妙味あるかけごとの前句付となって き句」と最も排斥した重ね言葉が、元禄の ね言葉どころか、「鬼も十八番茶も出花」な 世に氾濫するとは、貞門派にとっても思いも この景物取りの興味が、ついには数多の雑 貞徳が古風を確立した時「前句とは正体な 名の立ったついでにのばす御家の 盃、扇子やうの褒美に出し初め、一句付 金銀を只遣るにさえ上手下手 団扇では思うようには叩かれず 髪 替独楽 11

―目の上の皺は思案の寄せ所

産む時は男の顔が鬼に見え

寄太鼓

去状の硯に水をさす妾

示しない無記名の慣例を生むことになった。

#### 同 吟



前月号からー

村 好 郎

# エリートもいつかは椅子に拒まれる

を思い出した。平清盛の寵愛から捨てられて ように仏門に入った仏御前のことを心に描い 命をたどるであろうことを知って祗王と同じ 出家した祗王、そしてやがては自分も同じ運 た。少し連想が過ぎたかナ。 此の句を読んだ時、私は京都嵯峨の祗王寺

#### 小さめの乳房好もし秋のひと

に感じさせる。 詠んだものだ。秋のひともこの句を生かして いるし、私のような枯木もゆさぶられるよう 情緒てんめん、よくも品位を落さずうまく

## 爪の痛みは言わないでおく栗御飯

れる姿を見てそれで満足なのです。智子さん ただみんなが美味い美味いと喜んで食べてく こんな奥さん、こんな母さんでありたい。

> ろがよいと思った。 を口にせないと具体的に詠んでいられるとこ の日常生活がよく伺われています。爪の痛み

### 無切符で恍惚列車に乗りました

で乗るとは面白いうがった表現だと思う。 んな句をいつも見せて下さっている。無切符 った優秀女流作家だと思うにちがいない。そ どういたしまして、老いてますます頭も冴 知らない人は定めし若い新しい感覚を持

### 素晴しき人かも地下道に眠てる

ない。 も知れない。金に苦しみ、人間関係に悩まさ 易ではない。しかし案外悟ってしまった人か うらやましく、又素晴しくうつるのかも知れ れている我々、ふと地下道に眠っている人を おもしろい見方だ。ここまで落ちるのは容 凡九郎

### 文化とは思案も出来ぬ自動ドア

を批判しているところを私は買いたい。 が「思案も出来ぬ」とはうまい。そして文化 自動ドアの句は今まで色々と詠まれている 千万子

### ペンシルの芯は脇道など知らぬ

慕の心を書きつづけている女性が脇道など知ペンシルの芯でなく、一途に彼を思い、思 ている。そんなレターは私も欲しい。 らぬのではなかろうか。恋情がうまく詠まれ 頰ずりを待つ死顔は仏なる

思い出にひたる涙は一人きり

う程いいご夫婦であった。この二句はそのお とはこの御夫婦にして詠める句であろう。 気持がよく表われている。「頰ずりを待つ」 の南柳さんによく仕え、ほんとうに美しく思 作者のご主人南柳さんはご逝去された。

#### 人形も四季折々のべべ欲しい

す。女心がよく出ています。 よう。人形をながめても男と女とちがうので が欲しいは当然でしようと、云いたいのでし ましてや女ですもの四季折々の新柄の着物

そこそこにお通夜すまして逢いに行き

う。作者はそんな男ではない。そんな男を怒 りも、恋人と逢う方が心ひかれるの でしょ で、もう二度と逢えない最期の訣れをするよ っているのかも知れない。 こんな薄情な人も必ずお通夜にもあるもの

# ほめる気を自慢をされたのでやめる

素材のあることを知らされた。 れたことはお手柄。日常茶飯事の中に多くの よくあることで、それを逃がさず一句にさ

#### 売り物にせぬ誠実を慕われる

されているのは、付焼刃でない心から湧き出 二度は買う人もあろうが、それからはもうそ る誠実によるものと思う。魅かれる句だ。 の手に乗らない。この作家のみんなから敬慕 売り物にする偽誠実の多いことよ。一度や

# 紀内恒久

給

木

黄

迷 博

वि

村1

3

常

# 389 夜伽のゑりへひいやりとへき生姜

で、ねむけざましにする。 時ひんやりとする薄く切った生姜を襟につけ時ひんやりとする薄く切った生姜を襟につけいんかりとする薄く切った生姜を襟につける。

ひいやりと夜伽の襟へへき生姜

室山―賛。「へぐ」は切り剝ぐ。昔の人らし四智恵。

清ーねむけざまし説賛。

青木―この「夜伽」重病人を見取る身内の人々で、その中に居眠りの舟を漕ぎ出した人、(病人に対して血のつながりのない人など)の襟首へ、へぎ生姜を当てやって、「今夜あの襟首へ、へぎ生姜を当てやって、「今夜あのがヤマでしょうから(余命いくばくもなし)……」と眠けを覚してやっている状景のしうに思えるが……。

とへき生姜 要するに眠けざましであるだけ。 西原―前賛。何の場合の夜伽でもよかろう。

岡田

一同

## 30 あら面白からずの雪壱分もなし

鈴木─「あら面白からずの雪」は謡曲「鉢の木」からの文句取り。

江戸時代の庶民は、雪が降れば降ったで雪見としゃれて吉原へくり込んでいつづけ。こ見としゃれて吉原へくり込んでいつづけ。これなのが伊達なドラ達のしゃれた遊びの一つにあり、こうするには相当なお宝も必要だったはず。句意はそのまま。「ああこの雪に靡たはず。句意はそのまま。「ああこの雪に靡たはず。句意はそのまま。「ああこの当に解する」は謡曲「鉢のサん」位の心境だろう。

#### 岡田一賛。

### 別聞仕合ひ冬も蛙がないて居る

鈴木―「闍仕合」は芝居で暗闘する場面。

to

**岡田**一同。 **岡田**一同。

がある。

# 32 しつれいなあいさつハおまへでもいゝ

とした状景が設定できない。 ない。が、句の解釈として、どうもピッタリない。が、句の解釈として、どうもピッタリないのでは、むづかしい言葉は一つも

ばあい、ふいと出たことばである。わたしはい」とは用事をいいつける時など、ばくぜんい」とは用事をいいつける時など、ばくぜんい」とのままの句であろう。「お前でもい

かもしれない。呵々。ともをよく使うが、この種のことばを頻発すどもをよく使うが、この種のことばを頻発す

青木一司。男女いずれてもとれる。

青木一同。男女いずれにもとれる。現代ならである。

西原一同。「お前でもいい」というのが、失

ので、聞き付けた人が顔を出す。「お前でもので、聞き付けた人が顔を出す。「お前でもの人の名を呼ぶ。それが誰かハッキリしないの人の名を呼ぶ。それが誰かハッキリしない。」

## 33 むすこの花見内を出る名のみ也

鈴木─この句も、このままの解釈。花見、雪が木─この句も、このままの解釈。花見、紅葉狩はドラ息子達にとっては家を出るをだまし、今ではカアチャンをだまし続けてをだまし、今ではカアチャンをだまし続けてをだまし、今ではカアチャンをだまし続けているので、楽しい人生を送っている。

室山一賞。「名」は名目。

二六:27

岡田一同。

## 別権かつぎ連て家中ハ使者に出る

**鈴木**―「家中」とか「使者」とかの言葉があ

室山ー若君御安産。

室山ー若君御安産。

室山ー若君御安産。

御吉事の御使者かへりに槍を立て御安産槍持馬をおっかける 一四五・31

安産御使者かへりに供を連れ安九礼3

ê寺Ⅰ。 したがって、往途は「槍かつぎ」、帰途は「 したがって、往途は「槍かつぎ」、帰途は「

入江―室山説賛。「家中」は武家の家来の総称。「槍かつぎ」は、臨時雇の槍持。 権もちのおっかけて行く御安ンざん た元天1 下一告書延上兑て資。前出て、

目出度さハ月諸共にお使者出る―若君誕生説に賛。前出に、

青木

55 向ふより来る小てうちんそばや也

本一「向ふより来る小てうちん」は、「仮名手本忠臣蔵」五段目鉄砲の段―山崎街道の中の「向ふより来る小てうちん。これも昔の中張の。灯火消さじ濡さじと……。」の文句取りである。

をとぼして売り歩いている状景と思う。句は、闇の中での夜そば売が屋台に小提灯

岡田一同。

# 35 たまくの芝居つうじにやたらきょ

鈴木―めったに見ない芝居を久し振りで見る 機会にめぐまれた。もとより筋も役者も殆ど 知らない。と、たまたまそばに芝居なら何で も知っているという芝居通がいたので、その も知っているという芝居通がいたので、その ちに質問をするので皆困っている。というよ うな情景だろう。

室山―賞。「通辞」ということばを使ったの

入江―前説賛。劇通を通辞といったまで。

**岡田**―同。「芝居通」を「通辞」としゃれた

#### MANUAL STATE OF THE STATE OF TH

民底後あネ居試実罰一唄唇世人古紫 宿減戻たク心練母当針わをにのす陽 でっりたタ地だ養り一せか馴世だ花 買てすかイのと母そ針てんれのれの っかるいの良受義う女音でて絆う炎 てらと色売いけ母なの痴鍵女へか群 貰がきで場とと順結塔とっの位と え自風包でこめ々構は解子日置女愛 る分がん値でたにな薄っま課をを染 岩の押で段なとみ日色ただ尖た超不 魚靴しべ聞いきま々で口泣りしえ動 釣にてラい主虹か妻 達かがかにか るなくのた役をりと 者ずちめけな りれ棘だ席見ぬ るり ける

同人特集









 高槻市
 若
 四宮市
 村
 本
 会
 代

 高槻市
 大阪市
 大阪市

到着順)



乗不拗議裏老神職ヶ勲六偽娘コデよ底ど心面真 り景ね長長の様人 1 章段らよッモく抜ちを影実 な気て席屋坂よのスはのぬブコデもけら食にを れがた右後誇聞目バ要調夫1ッモまのかべ何示 た仕娘派れりいでィらべ婦ツととあ明がてかす レ事がとおをてあケぬでとをこ女こる歩した指 1 に媚左く捨ある 1 母初な履の仲のさ巾まさ針 ル念び派れてげいスひ春っく世々顔神をつねは のを かにててく便とをてなに強連を合てば揺 ら鳴軽よら利す出涸単生いれ抱わサうが 上入 さるく干かなじ勤れ靴きでていすテすな でれ 怪さ さ時す羽頷言のすてのてす五て夫寝れい や計る鶴ず葉道 く音い 十い婦るゆ 我せ るがた 年る駒とく カン いだ をる 寸 てね すあ 1, 12 て 3 るか

1



道歳引食ド素裏今解つ口泰満妻おふスてど沈明 うン晴方日説か癖然月の茶るタのち丁治 潮 のたドらののはまの自が目汲さイひらのか 錨めンし日無不っ中若見のみとルらと香ら 事要てに老て届のよはにもに続 笑えのの進い日 上裸ん我を謝ああい松いく苦大足乗仲まく 資仏をおでがエしのげくみる広情きがるをみ命 プて世たさど安さおな短太よれの 格像蟹どゆ家 が笑がりくに口作のいがり堵をんパい陽く来お あみ這をド父ン業て鬼生失梅世なンだよすしら る給い嗤ンと悲のとにきわを界のツけべる猫が えド母し服な手てず干と性干のビ弱の春 やう 3 るンがまをどをい すすにし妻 1 い恋 カン か遅住ずぬは叩る 触て難国 れみぐ É れあ T 3

ゆく

高槻市 福 田 大阪市 西 出 一 接 長取市 本 井 江 藤 間 日 一 美 長取市 本 田 カ ズ 正 茶 蘭 神 甲 毛 大和郡山市 本 岸 和 井 江 藤 間 中 一 美 高槻市 田 月 一 大阪市 西 出 一 美 高槻市 石 田 一 美 を髪川市 正 西 澤 田 カ ズ 正 茶 蘭 神 甲 三 ス ズ 八尾市 西 田 一 美 を髪川市 正 日 屋 一 次 毎 日 子 朗 仏 幸 水 子 吉 全 東 市 本 一 子 朗 仏 幸 水 子 吉 重 上 大和郡山市 本 日 子 朗 仏 幸 水 子 吉 全 東 市 本 日 子 朗 仏 幸 水 子 吉 全 東 市 本 日 子 朗 仏 幸 水 子 吉 全 東 市 一 大阪市 西 田 一 美



おも値神達星人喝蝶一請限て待商浜敬二雪耐妻 稲う引様者屑の釆々都求界っ合魂寺遠枚ぞえ三 荷一きもでの世のの二書をそ室にとを舌降て歩 も度き阿すひの無連府たどりあ徹言さまる来さ 拝燃れ呆なと峠いれ三めうとかしうれだまたが んえ買 あつは花舞県て越新の学海て生っ今ら でてわ人とひ見道に寄稲し芽他歴がるきさ日ず 定もず間不とえをあせのた四人意あ世てかへ肩 退見もな思つて母うて実の温の識っ話いさ男を 去たがん議に雲歩過母っかの顔せたをたまの並 っいなてそあ流く疎のて籠陽つずこや憎に顔べ て紅のもうるる の古来のへく のきい母がて 駅稀 鳥伸る あた人があ来 ゆっ植のに自 たが降る 75 くけ木創言転 りりる て抱るう 3

<



妬妥愛偽釣戯おつ純青笑防喝帰真ふ浅一無陸文 心協のり合言つい潔空う衛来ら実と知日理上机 なし水をいときてをを家にのぬの触恵ををの英 きた涸持の云あ来守画に廻なと冷れの大言孫知 ダ笑れつ取わいそり布宿れい思たるま切うへ月 イ顔た日れせ車う貴にをば花っさバあに積秒よ ヤの私妻たた接だ重で求弱道た嘘ッ喋すりより は隅はの話く触かなっめいで座のグるる無み盗 すに水目でなから人かたとよ敷暖のこ髭理夏む で翳中が手しら過でい青てしへか底とをを光べ にが花刺を老の去い夢いば唱退さの喋剃聞るし ガあ る叩い縁をるを鳥か譜院 母るりい ラる くの 振 染 り扇し のと て ス 詩 b b 櫛とく 玉 白 3 カン

ず



能世中生人傷精書山持ねホ虚愛枕見家西ち春望 面話国き並心進き茶ちぎラし得位え族瓜ょが遠 の好へのみののつ花味一吹いた置るの割ぼ来鏡 そき社びの出よぶのは本き日日そ瞳中るち のの長た事口さし白雑ぬの激のつがでとょ当界 一くのいををおのき魚いホし海とあ夫きぼりの とせ夢のし母天人にでてラいの直る のの 前ぞ 言愚はちてが気牛ま勝夫を雨蒼し倖他期知のく を痴大したあをなと負婦間にさてせ人待識こと 聞っきみらけほがうののい救が宿をにがでと眼 きぽいじ追てめら風佃夕てわ今のまな今話がが もいぞみいく槍き寒煮仕るれて朝たりも題嬉に 春越れ穂りき屋度影る満 忘やあてしご のさ高な 法 つ れするとくる す人 好風れ から 師 欠て £ カン 5 寸



め憎デ餅仁お恵山隙樟結休史着両横原昂身老生 ッ搗と日まのだ脳婚み跡眼の糸点ぶに眼と サ機愛され風らよ式た行の手をへりつ鏡死 ン男のます富け君黒いく卵で少戻がい要の の手人がぎ田のとい足姿へゲ ま伝生昇た林笑僕埴も耳ラ ゆばまユぬに 亀 け ス まう見るおを顔と輪だ余を る何 万て る」自角 で事たと菓通がはのま裕当温 7 まモ慢は 成もり世子りと痩中しのてめ ても \_\_を長な心間か抜てせでつ老て<sup>る</sup> 妥なの 満しらけもるすつ夫い日 協い独洒者り 亀返て 美べる歩婦るのす話 つら破 叛る 利す女 じ壊ししく 言な来り U どて カン らが 75 し始 云 ま わ

Da

3



# 向日葵の恋は出来ぬか人妻は

ある。 う。白眉の一句である。他の三句も佳。 川柳塔誌上に抒情の新風をもたらすことだろ であるが、願望を問いかけへ移行する叙法は この一句を鑑賞できることは大きな喜びで 向日葵のモチーフはありきたりのもの 由希子

# 友の死に仕事するのが馬鹿らしく

直な句を作ってみたいものである。 あり、そこはかとなく哀感が漂う。こんな素 深い句である。結語「馬鹿らしく」に余韻が 何の技巧もなく、さらりと詠んであるが、 金太郎

## 餅搗機男手伝う事もなし

搗機の存在で軽く詠った表現は見事である。 きい。便利さの裏側にひそむ男の陰影を、餅 サボテンの棘ならはっきり目に見える 役を追われた気楽さよりも虚しさの方が大

> 間不信の念がサボテンの影から鋭く感じられ 要因である。サボテンは正直者であるが、人 暗喩のよく効いているところが秀句にした

## 役人の中にも頭下げる役

である川柳を見る。 らその中に憐憫の情を発見した「愛の文学」 に乗せられたようである。役人を嫌悪しなが んでん返しを食わせるところ、落語家の話芸 「中にも」で注意をひき「頭下げる役」とど 役人の」と上五で読者に概念を持たせ、

杉

鬼

遊

# 留守にきて押し入れなんか明けてみる

ランである。 って出来る句とは違う。さすが水煙抄のベテ あるが、心の機微をうまくとらえている。作 誰にでもすぐ判り、何でもない句のようで 登美也

# カミソリは無限の可能性を秘め

伊津志

展開をさせる。 る。そんな思いが「無限の可能性」と抽象的 な表現になった。その曖昧さが読者に自由な 鋭い刃物から発する妖気は邪念も断ち切

# ビフテキを喰って仇討ちした気分

りが裏側にしっかり根を張っている。「仇討 する痛烈な風刺である。庶民と社会との関わ いる。単なる自己中心句でなく社会機構に対 目的を達した快感が実に見事に吐露されて

## ち」が利いている。

# 阿呆になることが賢い嫁なのか

覚めを感じさせる批判句である。ことわざ的 教えに対する矛盾を作者は鋭く衝いている。 ある時代の道徳観念に疑問をもった個の目

### 一匹の蠅 白壁を白くする

である。 感することが出来る。対比による驚きの発見 強調させられた作者の感動であり、誰もが共 ような一匹の蝿によって、改めてその白さを 壁は蝿の来ない前から白かった。 和 汚点の

# ノースリーブ女にすきが多すぎる

らいに、男たちを悩ました。 であった。女の部屋と街との境界を消したく 乗した訳でもなかろうが女性方の装いは大胆 ことのほか去年の夏は暑かった。それに便

# 紅葉掃く尼僧が綺麗すぎるなり

力となった。 ぎる」で止めず、つづく「なり」が映像喚起 尼僧の過去のロマンが画面を深くする。「す これは叙景句のようであるがそうでない。

紙数がないので句評を除き次に列句する。 心地よい疲れに嫁の荷が届き 北風を真近に聞いてかまを研ぐ 長男の扶養家族に成り下り ある日ふと他人の顔を妻に見る 農協も負けずに広告入れてくる 柳五郎 つるえ 孝利 3

柳美亭



### 正 本 水 選

辻 文 平 初詣 母には願う事多し

正月だ正月だとテレビやかまし 61

高槻市

竹

内

待つ人が居るから他見せずに去ぬ 趣味の会だけは出か けて達者なり

美粧院私の顔にしてくれず わけもなく無性に腹のたつ日あり

口べたで結構私なりに生き

昨日 まで奇形であった流行着

旭川

市

倉

大

柏

ワンテンポ遅れてユーモアだとわ うまい答弁を寝てから思いつき かり

鳩尾の真ん中へんにある疑惑かにサボテンと造花が似合う一 禁煙 水澄んで魚の逃げる場所がない の手がどうしても余ってる

D K 柏原市

> 1 谷 葉 子

> > **- 40 -**

手鏡のえくぼに 外堀はもう埋められて子と対話 蹴落したあいつほんとの友だった 真夜中のねずみに生きる音がある 三面鏡三つに写る顔を恥ず 寝顔だけ見てたら利口な子に見える 一寸触れて見る 兵庫県

島根県 松

本

文 子

ナイ

ターが済むと虫歯が痛みだす

ガラ空きの

列車お早うと通り過ぎ

背かれてだまされて忘却ありがたし

111 L 富 子

重県

日本は

いいい

0

ムードで正月旅をする なと正月だけ想う 三カ日良妻賢母でありました

嘘みんな脱いで裸の大銀杏 人ごみで息子他人の顔をする

虫の音をノイズと言うてしまう耳	青い眼に枯山水が腑に落ちず	石組の砂紋の渦へ散る紅葉	大阪市 岩 井 公 平	お隣りへ荷が来たらしい秋日和	味噌汁の具から始まる台所	もの言わぬ子もお別れの手だけ振る	手づくりの料理隣りの味で来る	テーブルへ落葉を敷いて秋にする	京都市 松 川 芳 ヱ	パスポート残り四年に夢がある	日本を離れ大きい美に出逢う	姪の着る中国服に迎えられ	髪洗い女は明日に身構える	真直ぐに生きて女のもの足らず	和歌山市 福 本 英 ?	雑踏の中の別れで救われる	記憶からこぼれないよう逢いにゆく	文章にすれば恋しい人になり	自画像はレベルを少し上におく	初春やまた寄り添わん夫婦箸	八尾市 田 中 紀美代	類杖の高きにいつもいるあなた	夫婦して生きてる不思議を語るなり	ゼンマイを掛けるはしから逃げてゆく
			平						子						子						代			
妻の留守それを理由に酒の量	過疎校のもてはやされて転入生	勤めする妻は数字に強くなり	酒強く成って単身赴任終え		貝殻の模様は海のロマン秘め	さりげなく嘘も入れてる占い師	定年の日課になった散歩道	苦労した親が無欲な子に育て	大陽を受けて雑草背伸びする		保険満期印鑑の隅欠けていた	子と対話同じ高さの椅子にする	持駒が不足受け身の陣を布く	人減らしの机に一輪菊を挿し	玉子酒明日は冬至の風を聞く		倒産のドックの岸に魚群れ	感謝する気持を雑音消してゆく	ふるさとの立枯れ松は父老いし	筆が立つことだけ判る投書癖	先廻りする癖未だに痩せて居り		イエスとノーの間で女は逡巡うて	どの間にもキイがないのを不思議
				島根県						諫早市						鳥取市						尾鷲市		がり
				佐						江						中						渡		
				大木						副						森						辺		
				裕						二牛						葉士人						伊津志		

会会うた人にまた会う年の市 質けて勝つ数に今度もしてやられ 星月夜戦友みんな星になり 星月夜戦友みんな星になり	何かと云えば餅をつく故郷がありおしゃべりが過ぎて今宵は無口なり力にはなってやれぬと父は老い力にはなってやれぬと父は老いけが過ぎて今宵は無口なりが過ぎて今宵は無口なりが過ぎでからない。	<ul><li>本と今夜鬼になったろ酒をかり</li><li>一坪の庭に裏山四季をくれ</li><li>一坪の庭に裏山四季をくれ</li></ul>	野仏の涙は夜の風が消す 受焼けに父が大きな影となる 受焼けに父が大きな影となる	生活の糧の漁火眺められ
岡 山 市	り唐津市	兵庫県	海南市	
原	Ξ	野々	牛	
田	浦		尾	
凡 太 郎	ひろ坊	ゆ う 也	緑	
風圧へ一枚ガラス意地をみせ で何にしよう値段のないメニュ で関けたままで歯科医に放っとか のないメニュ	の が が が が が で の 実 の 実 に ま みれ て 犬 が 戻 り くる で の 実 に ま みれ て 犬 が 戻 り く る の ま の も る ら る る る る る る る る る る る る る	正旦の僕は変らぬ一万歩 上天気はたらく靴が乾してあり 上天気はたらく靴が乾してあり かグイスの声も流して春芝居	楼 切っ先は風が運んで来た噂 秋桜か弱い揺れをかばい合い 大輪の黄菊は男の紋章で 大輪の黄菊は男の紋章で	To
今れし	已畸	愛知県	大阪市	和歌山市
矢	<del>p</del>	池	堀	浦
野	谷	田	П	野
佳	利	香珠夫	欣	和
雲	美	夫		子

表情を変えず二の矢の嘘を言い の音へ半目をあけた寺の犬

這うて爪から飛んだテント

秋 畝

羽曳野市 麻 野

デモ隊へ不本意乍ら譲る道 にそれぞれ庇う物

熱燗にして遠く聞く笛太鼓

や咳一つにも秋は憂き

風が出て夫婦

東広島市 石 井 さわ子

信号が青で話がストップし 老夫婦対話もなくて花バサミ

風呂炊きが父の日課と母の文 水割りの氷が鳴って黙秘権

母ちゃんが好き臥ていても叱っても

治市

渡

辺

南

奉

空の青だれかに手紙書きたい満点の父へ妻子がくたびれる

淋しさヘタバコが殖えただけの E 事

寝屋川市 林

期せずしておんなじ洒落が出る夫婦 干したその 夜の月がまんまる 13

客去んだあとは栗剝く妻であり

見きわめて風船おりてくる

1/

唐津市 1 勝

> かい 猿芝居腹を切 警察犬思わせぶりに臭ぎ廻 つぶり破紋残して水に消え ってはみかん食い 1)

幸福のライン背にして生きつづけ

つき合いで飲んでる夫待つ夜なが

唐津市

中

紫

浪

闘病が長びきいつしか疎遠がち 幸福を見せたい写真添えてあり 百舌の餌晒して石榴熟れており

島根県

岩

 $\oplus$ 

和

直線を伸ばし

てゆけば下を向

喋るのは人間ばかし喧しい この寒さたしかに一つ歳を食う

満腹で羊の群を追わぬ獅子

電線が唸る豆腐が売り切れる

松江市

梅

本

登美也

足早く去ってかかわりたくは な

10

五色豆チンチン電車なつかし 無医村に長者番付配られる

61

富田

林

中

村

優

古池 宴席が静まりかえる黒田節 へ落ちて昔のままの 月

策 一つ矢鱈に握手し て廻

円玉溜まりへそくりにもならず

満

吹きだまり過去もつ同士肩を寄せ 住みなれた街からピエロ旅仕度く 住みなれた街からピエロ旅仕度く	の先を言えば話がこじれそう空を突き抜くようなノッポビル本番鯉が動かぬうす氷	わらを焼いて出稼の夫急くを子も居らぬから部屋丸く掃くを子も居らぬから部屋丸く掃くぎたことあきらめ今日から前を	蛾は蝶になれぬ夜燈へ舞いを見せ メロドラマふっと私の過去が有る 隊の無い女悲しい過去が有り	絵のように落穂も拾っていた農婦 初百舌鳥を聞いた聞かぬで朝の膳 を見び子を売るお店
大 阪 市	出雲市	東京市では、東京市	5 又 也 ゴ で	札 幌 市
野	古	小 非	k s	北
田	岡	山	予	村
君	きみえ	悠	3	深
枝	え	泉	1	星.
童全白云	め横明南			
童顔をかすかに残している鏡 白旗をいつも持ってる処世術 云うことも云わず世の中拗ねている	めいめいに秒針を読む年の暮れ 関かりを消すと追憶の灯がともる 南窓開ければ緩い坂を来る	だれかを待っている が原市 岩 が原市 岩	₹	では、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、
をかすかに残している鏡をいつも持ってる処世術をいつも持ってる処世術	めいに砂針を読む年の暮れめいに砂針を読む年の暮れりを消すと追憶の灯がともる関ければ緩い坂を来る	春のブランコだれかを待っている ・ の毛の一本さえも恋を知り の毛の一本されかを待っている ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	曜農業そんな言葉が似合ってる ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	の で ーシャルに合わせたように 風邪をひき すをもらい買うより気を遣い で で で で で の で の の の で の で の の の の の の の の の の の の の
をかすかに残している鏡をかすかに残している鏡をいつも持ってる処世術といる鏡	めいに秒針を読む年の暮れりを消すと追憶の灯がともるりを消すと追憶の灯がともる開ければ緩い坂を来る	春のブランコだれかを待っている 戦は単純な女になりすます の毛の一本さえも恋を知り の毛のであっている の形の深さに酔うている晩秋	曜農業そんな言葉が似合ってる 場焼酔うても時価は避けている 場焼酔うでも時価は避けている	ない でーシャルに合わせたように風邪をひき すをもらい買うより気を遣い では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、

よりも勝手知ったる集金人和歌山市	無事な顔確めあって晦日そば 落葉焚く煙 遠足駈け抜ける	産地直送お国訛りのないマイク高槻市	振り返える余裕も見せて老の坂正月は家に篭りて欠伸する	老ばれと言われ自尊心燃え上がり置き炬燵夫婦相和し隠居部屋	豊中市	真珠御殿まむかいに海女母貝撰る	ごうえっちこれったこうこのいちじくの熟れるにまかせひとり住む	ママバレー父さん野球に子は留守居	羽島市	が素直に喜び合え	秋深し昔は松茸うまかった	老妻が鏡見て居る敬老日	世相にはついて行けない下駄をはく	島根県	釣りをする糸に夕月からんで来	手探りで姑への橋を選ってる娘	たてまえは朴念仁で子煩悩	目を据えてゼロを数えるウインドウ
堀		大			田				伊					木				
排		垣			中				藤					村				
三 男		たもつ			善四郎				静江					はじめ				
企みを忘れた日からよく眠れ 特たされて雨の家裁の堅い椅子	ピーポーに揃った夕食ほっとする	留守宅の仏花一葉落ちたまま言葉の森探して言葉みつからず	メロドラマわが分身の影をして	男のこぼす子守唄		無駄話しながらさぐる聴診器	逃げ道も考えている一人言		総裁選どなたさまでもよい焚火	通り挨拶すんで国言葉	むつ入港阻止子供の駄駄に似る		争いが嫌で天寿のことばかり	鏡など無くても同じ老いの髪	二三日考えてから返事書く		袖引いただけで通じる老夫婦	天国に牽制球は投げられず
į	倉敷市		岡山市	さ	竹原市			尼崎市				唐津市				寝屋川市		
	中		砂		古			中				桧				福		
	島		田		田			塚				垣				富		
	彩		静		鈍			喜				岩				隆		
	AZ.		佳		舟			甲				光				子		

生なと大事にしよう	部星数の多い家庭で温まらず幸福が続きゃ続くで来る悩み		保育園同じ衣裳の孫探す	留守番は仕事の中に入れられず	一人居の老人何時もカバン提げ	唐津市 浜 本 義	未練断ち切れず空の星数え	潤滑油にちよっぴり音痴歌唄う	美辞麗句ならべて男の腹見られ	岡山市 串 田 句味	どさっと来てどさっと捨てる広告さ	無神経に振舞いつつも厄男	旅先の女マッサージ 妻に似る	寝屋川市 稲 葉 好	幹事さんまだ箸紙はそのまんま	なに見てもおいしそうです快復期	ラッシューアワー疲れた顔の俺がいる	大阪市 白 石	垣根越し今朝も散歩のベレー帽	眠れぬ夜柱時計が問うてくる	妻の振る黄旗背にして朝を出る	新宮市 辻	悪人は悪人らしき顔写真
		汀				美				地				子				潔				I.	
	夕月に月の砂漠を孫歌う	り 飼が遅くな		わき見せず旗追っかける観光地	出番まで無口な男で待機する	胸のうち勝算あって目を細め	描述	凡人に成り切って日々是好日	自己過信上司の顔が莫迦にみえ	頭首会談煙草の灰の捨てどころ		雲のない日の空は一日中寂し	人が投げる憎しみを胸にあたため	子らはみな本城を構え子を育て		小魚を海に戻してやる日和	スペアーを持たぬ男の生き地獄	雨の日は雨の仕事が待っている		恵まれた人に勲章がある文化の日	満員車背押す性別だけ解り	秋活けて壷も寂しい風情みせ	
岸和田市		b	倉吉市				滕井寺市				大阪市		る		今治市				岡山県	07.31			岡山県
古			田				中				藤				園				海				池
野			民				原				森				部				納				田
V			碧				比呂志				小雅				Œ				百				半
で			水				志				子				則				JI				仙

ねだったら敗ける親だと知り抜かれ	大和高田市	集金人民話の里に辿り着く	人柄の集金茶話に腰を据え	鱈汁は冬の前触れ喉に告げ	青森市	なり振りを構わぬ答きっと出る	いろんな事ありましたよと老夫婦	信じないから神様がソッポ向く	東大阪市	ほとほどに心の牙はさびるべし	道問えば黙って呉れた案内図	煙草吸う女デッキを独り占め	岡山県	失礼な話途中で電話切れ	ハッタリを効かせただけの一日よ	空財布とんなに心が重いのか	八戸市	女ひとりへ冷めたい風はさけて吹け	ライバルへ愚痴をこぼせば負けになる	傷口にしみる噂をのせる風	呉 市	嘘一つ多辯な夕食にしてしまい	生活のリズム崩さず老の坂	茜雲幸せ呉れる色に見え
	岸				五十嵐				萩				=				島				山			
	本								尾				宗				田				根			
	豊平				操				真佐志				吟				昭				喜代美			
	次				史				志				平				治				美			
お賽銭もあげずシャッター音しきり	ぐるぐると松下村塾覗く足	岡	入院を見舞えば病友と将棋指し	実家泊り妻の残した食事表	炬燵よし其処に幻想の詩も生れ	যান	定年を妻も息子も気にかけず	まだボクの名前が残る設計図	心だけ豊かな妻ともう定年	turi.	舶来を買え買えとはアメリカの声	買い物に行く御主人でお人よし	永源寺橋まで赤い色使い	-	満月が池を覗いて詩が出来	褪せて咲く菊に豪雨が打ちつづけ	枯すすき明治が歌うクラス会	-	園芸ハウス不夜城となり暮れていく	如才なく振舞う友の声軽し	新卒の知識にひるむ昼下がり	由	ご主人の味か甘口でもてなされ	あの時の嘘に心で詫びておく
		岡山市				羽咋市				橿原市				大阪市				呉市				唐津市		
		井				Ξ				西				平				玉				岩		
		Ŀ				宅				本				井				木				崎		
		柳五				3				保				露				志恵子						
		郎				亭				夫				芳				子				実		

間に秋は野山を赤	校の秋は子供の笑顔		岡山県	社の顔で飲んでるピエロかも知れず	心臓も強いが人情味もあふれ	過去包む聖書片手に道歩む	鳥取県	定年の名刺に学位だけ残り	世は移り砂糖がよどむ紙コップ	見本市泡立草に囲まれる	町田市	針金に生命通わす草月流	念入りに乳房を廻る聴診器	焼け跡に建つマンションに陽を盗られ	熊本市	一杯の酒で涙腺みな開き	何もかも揃てるさかいもの足らず	マンションに住んで身近かな空がある	川西市	殊更に覗きたくもなし高い塀	苦労性風の向きまで気にかかり	門前の咳払いがノックの代理する	出雲市	サファリーランド曳き回し檻に似てるバス
			柳				加				竹				有				氏				園	
			原				膝				内				働				林				山	
			孝				茶				紫				芳				洋				多賀子	
			柳				人				錆				仙				敏				于	
	葉美しい	天気報地方によっては日本晴	北風を待って居るのか山茶花よ		反旗ひるがえし我が家の網戸越える虫	鍵っ子の吹くハーモニカ夕陽そめ	老骨にむち打ち息子の帰り待つ		古墳から栄華を偲ぶ金の文字	いつどこで知ったか孫のなげキッ	稲架木の高さ老婆の腰がのび		初ヒ孫に孫たちの陰うすくなり	来年を言わずとにかく賀状出し	男性が先に弱った二人三脚		ストーブが恋しくなった冬近し	抹茶碗両手で触れて佗びを云う	凌ぎ易い季節に夏バテ取返し		妻の非と引き換えにする慾があり	赤信号渡る老婆を待つ笑い	来年を引張り寄せて賀状書く	
新潟県				岡山市	る虫			出雲市		ス		高知県				尼崎市				大阪市				岡山市
高				清				高				Щ				小				山				花
野				水				見				下				林				本				田
不				金太郎				鐘								文				炉				たけ志
				A				堂				登				月				斉				1)

涙より笑顔が怖いときもあり	将来を嘱望され女つけあがり が言を得ってたような記者のベン	季	共稼ぎ子供は二人と決めている会場の壁に切りこみ西陽さす	アルバムを話題をつなぐ材にする無茶苦茶に折る折紙の紅葉の手	寝へ心満つ	から視野をずらした飛行雲と仲良しといううちの嫁	葬式の準備する人看取る人お見舞に写経の心見てもらい	晩酌の時の機嫌で暮したい 便乗させて貰うて時間長い事 妻が買うたネクタイー々値を聞いて
助 日 計	K H T	出雲市	唐津市		尼崎市	広 島 市	総社市	
萉		京	桑		ф	光	水	
厚	泵	山	原		辻	井	子	
t	<u>t</u>		掬		千	み	つ	
世夕老	圣	栄	治		子	ほ	つるえ	
大空へ投げた石コロに賭けてみる	属国でないぞ洋語の乱気流喜寿にして五合目の富士の陽に出会い熊里	吊り革に勤め帰りの皆孤独 を空に富士の御機嫌ありがたし	鏡から見ればあなたは行動派大臣の連休墓参郷土入り	片笑くぼ来世はきっと泣ぼくろ松江	老の足孫の足から見はなされを二人弁当の味語り合い	事なかれ主義でも年金ついている	上げ膳下げ膳妻が喜ぶ旅の宿食敷	人間が作ったコンピューターに人間わら生きのびた空しさガラス戸たたく蝿
			市	市			市	わ
U	皮 西ク 仮		西久保	黒目	大森	北川	中津	野れる中
ز.			<b>本</b>	大	登	/·I		御
7	た		石	鳥	龍	進	伊勢吉	前
- 1	1	•		520	176			

年とれば人間いつか小さくなる	クリーニングした明治の気骨者切り札の甘さ流れに逆らえず切り札の甘さ流れに逆らえず	米粒を踏んでる足は罰当り筆まめを孫にうつして老満つる骨接院老の盛り場のように	告別式弔辞に川柳取り入れて、大雨の三日つづきて知事選挙
唐津 岩井	i Ш	泉佐野市 長崎県	鳥 取 県 県
简-	岩	岩 大	和川
井	道	崎 江	井 井
朴	博	和静	観白
龍用	友 友	子 子	洋 峯
善人の怖さ真っすぐだけ見えるいの一徹父のよさがあるを居して呉れる小銭は汗が滲みまるがある。	をも一度ふってやはり 名をえらぶ老眼鏡をかるをも一度なってやはり	日本のドラマ何かを食べるとこった。 をなと女は妥協せぬ構え をなくないである。 をないるとこのである。 はのいるのである。 はのいるとこのである。 はのはである。 はのいるとこのである。 はのいると、 はのいる。 はのい。 はのい。 はのい。 はのい。 はのい。 はのい。 はのいる。 はのい。 はのい。 はのい。 はのい。	佐世保入るムツ反対派のお出迎え 関連を請負う寺社の御繁盛 習字紙幼いころは塗りつぶし
	岐阜市	大洲市	名古屋市
	市	米	鈴 玉
	JII	澤	木 置
	路类	暁	可

明

篏

香

魚

## 評. 高 橋 操

というところ。出るべくして出た印象であっ人は期待に報われ、ほっとした安堵感で一杯 このたび「千亀利」発刊を知って多くの川柳た人々が多かったのかも知れない。 そんな時 とりに句碑を建てられた頃から、 囲の人々はいずれ近いうちに句集の発刊され ただろうと思われる。 ることを期待し、そうした機運を察知して居 高橋操子さんが五一年十一月久米田池のほ 君を知る周

い立派なものである。然もこれが女性の句集近来種によるとくり十二 今までの川柳句集のイメージをくつがえした 近来稀にみるどこの世界に出しても遜色のな ずっしりとした重量感、装丁、体裁、紙質

納得のゆく素直な句風で多くの佳い句をいつ裏に徹した眼で人間性の探求に、世の人々の標生活であり、娘時代、いわゆる世の中の表操子さんは「川柳雑誌」以来の長い長い川 も見せられた人で、この句集のどのページに く人々の脳裡に残ることと思われる。 もそれらの句が人生を語りかけてくれる。

> は岸和田の女親分とは矢張りほど遠い印象で利」の随所に滲み出ている。女らしい心遣い れた。女丈夫と云われ女傑と讃えられても、 中、戦後の流れの中に花々しい成果を挙げら売の二面に奮闘努力を続けられ、難かしい戦 あろう。 ての行き届いた床しさは、この句集、「千亀 やはり「一抱えあれど柳は柳かな」の女とし 夫君に先き立たれてからは子女の育成と商

だ。河内源氏楠 う。河内源氏の流れというところだろう。 に近い和田氏として、岸和田と名乗ったとい 地に封ぜられ、一番海岸に近くに居るので岸 の墓がある。この末裔が明治維新前までこの 所に正行と俱に戦死した一族に叔父和田賢秀 もまた「契り」に通じて女らしくて心憎い程 岸和田城の千亀利城から取られた句集の名 処女でいることを世間は不思議がり 女性の句集名として「千亀利」は最適の呼 一族の正行戦死の四条畷の墓

今の大ぶりな操子女史を見ているとこの句

だなあと微苦笑する。 に詠まれた過去のその頃を思うとやっぱり女

話だ。百円札をくずすのに町内を走り回った 昔のことを思い出す。 時代色が面白い。百円が大金であった頃の 間違いはない百円を読み直

――点を見詰め少年譲らない しているようでよく判る句である。 誰しも入って行ける句境で、 一住み込みの宿舎を親に見てもらい 流行に遠く主婦の座くずさない これらは小店員を見ての感想句であろうが 何かでみな経験

菊

句集の常識をくつがえす

澤

11

松

量

一涼み台百までたたく母の肩 初風呂へ去年のこうやく貼ったまま 夫君の死よりの立上り、 泣いていては家族みんなが食えませ 主婦時代の思い出も懐しい。 82

やりくりの思察も尽きた午前二時

身も心も余裕が出来て世の中を見る眼も落ち ひきつける力強いものがある。 ついてくる。 - それぞれの生き方汗は光るもの やっと子女も成長され、商売も順風満帆、 これら苦闘時代の頭の下る句に多くの人を 女手で泳いでうわさ立てさせず

りの眼である。 ユーモアはまた生気を蘇さす終戦以来のゆと -終点で恋を失うバスガール 潤いのある眼でぐるりを眺めると、生来の

娘のために耐えてよかった日を送る

う。 る。この人にして深い意義のある句と言えよ やっと落ちついた安心の心境 がよ く出 てい

大工さんの気質それぞれの釘の音

ましい。蓋しこれも持って生れた人柄の現れ の現われが、この句集の随所に出ていて微笑 迫らぬ泰然たる中にも優しい。大和撫子の血 て勝者の温かい同情の念が著者の現在の悠容 落していった同業の人々の顔が映ずる。そし 勝ち抜いて来た商売人の眼の奥にも多くの没 方で判るほどの研ぎすまされた心は鋭どい。 大工の一人ひとりの個性まで釘音の打ち込み かとなく漂っているが、落ちついた現況では 冷厳な生活の冷たさがこの人にしてもそこは た時のスケッチだろう。商売一途の時代には 先年新しい立派な家を東岸和田に建てられ

だとある人が言っている。 ように感じること、燥たる太陽を思わすこと とに依ってぐるりの人々がみな温かい春風の 曇りなく月はあくまで清らかであろう。 である。円満なる人格とはその人に触れるこ 名遂げ望むところ皆々この上は長寿あるのみ 夫君と孝心な子女に囲まれ、いわゆる功成り る。生業に成功して子女に恵まれ、理解ある ーふるさとの月は一そうまんまるし で不思議なことでは決してない。 ている。心情平静まことに羨しいかぎりであ 小恙を得て加療、退院された折の作と聞い 心平らかなれば物みな丸し。澄み渡る心に 合掌をすればやさしくなる呼吸

様が、貴女に課せられた最後の使命であるの て暖かい風を送って下さい。それもまた神

写真: - 著者高橋操子さんと、編集者 本誌の不二田一三夫。

太陽の人、操子女史、いつまでも長生きを

祈るばかりです。 けられて張りのある余生を楽んで下さるよう に何の求むる処はない。療養によくお気をつ に関して私の句集に対してのお祝吟も この上の願望は長寿を祈り奉るのみ、あと 千亀利成るあとは長寿を奉る

とした形になって現わされている。そのこと

高橋家系、万々歳の現れはここにはっきり

女系家族孫もあっぱれ女の子

カメラ・日野時子

大阪市南区鰻谷中之町二〇 111 (千五百円・送料共 柳

発行所

かも知れない。

句集最後の句

で「おめでとう」「お天気もよくて」のお祝「千亀利」発刊記念句会の会場ロイヤル宮殿 の一角では、高橋操子さんの処女句集、 新嘗祭」で国民の祝日である。―ここ岸 月23日はいうまでもなく「勤労感謝の日 川柳の祝日でもある



・ 謝辞の操子さん

柳句集

発刊記念句会

昭和53年11

月23日

1

ロイヤル宮殿楼上

高

橋

操

子

著

ろう。 年の寒さが口に出るほどだった)とにかく快辞に起たれた諸先生も、今日の暖かさと一昨 晴に恵まれたこと、これは天からの祝辞であ 昨年の今日、久米田寺境内での句碑建立の日 きょうのような日をいうのであろうか。 雪がチラホラしたほど寒かっただけに、祝 暦十月の異称である『小春日和』とは、

い感覚にあふれている。かも新鮮で、さすが綜合結婚式場にふさわし をされている。お天気なのが何よりである。 高橋操子さんは出席の方々へ明かるく挨拶 感覚にあふれている。 新築なったばかりのロイヤル宮殿はなにも

(大会当日に寝こまぬように、とこんな言葉

ってしまうほどの、正に超大広間である。のだそうだが、懇親宴百三十名がすぼっと入 が流れていた。和風大広間は「老松」という が何度か交わされたことだった) てしまうほどの、正に超大広間である。 会場には宮城道雄の「八段」や「秋の曲 正面の舞台右側から、小松園氏作の祝吟 - 亀利成る後は長寿を奉る

> 高橋操子句集 拶会 干亀利」 発刊記念句会

柳謝挨挨司 話辞拶

兼 歳月

仕入れ 0 れん 服

展

植山武助氏

一生々庵、

三夫、西出諸先生

小松園氏代選) 若橋深本高日 川榎村本 高 白光子 多久志選 好聡選選 薫 風選 栞選

日の寒さから始まる。 を岸和田川柳会からお礼申しあげます。のご助力で、りっぱな句集が出来ましたこと 挨拶に起たれたが、まず一昨年の句碑建立 西出仁三郎氏―岸和田市文化協会長として 氏と操子さんは会長、副会長の仲であり (句碑建立委員長だっ

生操 雇子 操仁三郎 武

助

中中田自

たつお選

高 西

納 挨 兼题 辞 和服 榜 川州聖幹 若本多 杨 高董 柳話の生々庵主幹

想

勝さりのこの人に涙が光る。 なにかも皆様のお力添えで出来ました。と男 くお贈りする。 して西尾栞副主幹の手から直原玉青画伯の色 が記念品贈呈、 第三の句集を今から待っていると結ばれた。 、故昌男夫人)岸和田川柳会から植山武助氏 ここで祝電披露。花束贈呈は林春栄さん。 高橋操子さんの謝辞。 (目録)をそれぞれ高橋操子さんにめでた はその人の歴史をきざんだもので、 と川柳の仲でもあるそうである。 川柳塔社常任理事ほかを代表 句集 「千亀利」は

しあげます。 に催されましたことを、 念句会が、岸せんの主催で、このように盛大 らく待ちわびていた、高橋操子さんの句集、 中島生々庵主幹の柳話 亀利」が川柳塔社から発刊され、その記 こころからお欣び申 本日は、 私達が長

川柳塔社の参事として第一線にご活躍を続け 不自然な感じがしてなりませんでした。 ないということは、 ておられる操子さんに未だ句集が発刊されて 柳歴五十年、岸せんの会長とし (中略) 出来上がった句集「千亀利」を見 むしろ不思議でもあり、 て、

ります。題字の久米奈良子さんの清雅優美、 編集者一三夫君の手腕が心にくいばかりであ 満田彗峰画伯の装画ともに、さぞかし操子さ らかになごませる配慮がうかがわれるあたり の色調を紫に感じさせ、手にする人を、 くばり、句の配列等々は勿論であるが、 充分ご満足して頂けるものと確信致します。 さぬ程の出来ばえで、お手にされた皆様にも ますと、内容も外観も、 像いたします。 も生涯感謝して忘れ得ないところだろうと 用紙の選び方、活字の大きさ、 容易に他の追従を許 頁の中の字 やわ 全体

ばかりだが、これらの人々をひっくるめにし 持ってこられた。この女性群はそれぞれ独特 て、そこに高橋操子像を見るのだが……と結 なタイプの持ち主で、いずれも善意の人たち 「あすなろ物語」に出てくる六人の女性を 生々庵主幹の卓見は、 句集「千亀利」を祝福された。 操子像を井上靖原作 まこと

> 多久志・生々庵主幹・その後ろ良子・ど女の皆さんほか。 (写真二列目右から好郎・花梢・柳太・三列目一人おいて



たように、操子さんの た名文である。司会の薫風さんが云うように に温情あふれるお話だった。 大坂形水氏の 「谷町」の序文もそうであ 「干亀利」の序文もま 2

幹に書いていただくよう頼まれたのではない かとおもう」と。 句 集の全貌は序文によって代弁され この序文は、 故路郎先生が生々 へ魔主

ような場面を演出されていたとは夢にも思わ す」と冗談のように聞かされていたが、この 拍手の中に起ち記者は面食らってしまった。 子さんの友情の合作であろうか。一一九氏の 操子さんの温情と、司会者の薫風さんと柳宏 る編集者の紹介があった。これは主催者側の に光彩を放つであろう。 操子さんから「今日は不二田さんが主役で 句 った。ひと言しゃべれば涙があふれ出る 集刊行句会では異例中の異例とも思われ

(太字が秀句

花道で袴きびしい風に逢

利の真価は生々庵主幹の序文によって永遠 30 干 と、いよいよ披講に移る。 はどの ここでは原 感激

らだを休めてのご出席だった。 から岸和田へ前日に着かれ、そこで一 愛と和のシーンがそれぞれ展開されてい 若本多久志氏はご病気静養中のため、 だっ 泊 西宮 4

り十名増えて一二九名という賑やかさだ。に早替りして懇親宴へ舞台もかわる。句会 祝辞を述べられ、 秀句一句に呈賞。句会がおわると机が食卓 各選者が披講まえにひと言ずつ操子さんに 温く熱いものを感じる。 。句会よ

市文化協会長の西出仁三郎氏。 **岸和田市長の祝辞が、** 

司会も薫風氏となる。乾杯の音頭は岸和田 みを加える。 さらに

> として残るだろう」と。 高橋先生の句碑と句集は岸和田市

の歴

きだ。 べると飲めや踊れや歌えの華麗な舞台の幕 iv と清酒、きれいどころが数名サービスには行主哲子で入りま 句主操子さんの心づくしの会席 料理 にピー

和歌山、 分だけ紹介しました) は菊沢小松園氏の閉会の弁がたのしく和やか 事だった。その他素人名人級がずらり、 歌山少女?歌劇団がへここは岸和田、 流好作家、 幕をひく。(スペースの都合でホンの 上方甫流の甫貴さんの黒田節 仲をとりもつ川柳塔 内藤きさ子さんとの相舞ほか、 6―と替え歌も見は岸和田、向いはこの相舞ほか、和 かい つて 最後 0

ペン・不二田一三 夫 力 メラ . 日野 一時子

若本多久志選 多久志 雄次郎 太茂津 11111 蘆 笛裕幸 風 縄のれ ぜいたくな話も知った展示会 執念がみのって花輪 絹の強さおんなの首は細 署名して素通りしとく展示会 展示場の死角で飾らぬ声をきく 展示会それから妻の愚痴続く 兼題 兼題 「展示 ん明日の英気はここで買 のくる展示 くとも 西尾 村 5 好郎

女心の四季を分け

た和服

和服

絹布団泪を落すこともあ 無表情の表情絹はドラマ抱く 羽二重の白が悲劇の主人公 絹座布とん汚職の匂いおいていく

聰夢選

花

歳月が許せる女として会わせ歳月が架けた夫婦の小さい橋 小商人せわしい朝の松屋町 極楽の夢を仕入れてきた法話 仕入れ物背負って帰る露地の店 歳月の流れの節となる佳き 歳月へ一途な愛は流されぬ いの上手は仕入れ上手なり 月は母の祈りの中にある 八正直すぎた仕入帖 一歳月 仕入れ 中 深日白光子選 一田たつ **派風選** 白右花 光 子 近 梢 与呂志 近 たつお子子 お 選 夏 和 足袋を脱ぐ女の業がこぼれ出す П 和 お 緋 袴もう家宝の様にねむってる それなりののれんではやる縄のれ 一代目 温服着て 兼題 過ぎて和服に帰える女秋 服いま仕立て直して母を着る ンドンもパリーも闊歩し のずから主従師弟のある袴 の袴神に仕える黒い髪 一本立派にのれん守ってる 本立派にのてして、複本

兼題

の群散らした巫子の

朱の符

聡 選 - 55 -

タ 栞選 雀踊子 ÉIS 子花子

花一小 三 村 夫 園 良子

h

美智子



### 橘高 凮 選

高橋 夕花

ふり返る風を見送る旅ひとり この街のあかりを守る時計台 炎の中くぐりぬけたる壷の静

にんげんの手で折鶴の羽根を折る 明日があるあしたがあると毬をつく

人形の顔の白さが憎くなる 月原

宵明

巻紙へすらすら書けて幸薄し 菊人形の裾から秋の挽歌聞く

七十はさほどに遠きことならず 母の座を固めて帰るとこがなし 大阪市 小出

智子

階段をせっせと拭いて母なりし 郵便屋さんの背中にある夕日 中島

秋刀魚焼く男夕刊拾い読む 病む床に指の股から灯がこぼれ

東大阪市 斎藤三十四

> 種を播くミレーに大きな空がある 八間を金に見積るのも時代

旅つづく冬咲く花もある安堵

有為転変かげ絵のように人が過ぎ 河野

分裂した核を遠くで見ていよう 華燭に熔け合う親の思想と子の思想 大矢

花嫁の父は一瞥されるだけ 婚姻届処女と書く欄見当らず

竹原市

岩本

寛子

花嫁の父の涙にみとれたり

愚痴ひとつのみこみ深呼吸をする

川西市

戸田

古方

首の鈴猫が自分でつけたとさ 鼻が気になる豚の鼻猿の 鼻

幸

引く一は零が人生 青森市

工藤

甲吉

のっそのっそと冬の跫音 寝屋川市

海見えて明石の雨よ鶏頭よ 燃え尽きたカンナの声を聴くごとし 小林鯛牙子

執念に生きた命を運と言う 夢から醒めてあなたに帰る家がある 口紅は秋くちびるに恋人よ 大阪市 神戸 市 江城 宇佐美和子

修史

他人様の五十の老いと見比べる いきれぬ ノルマ へ無口の日が昏れる 東大阪市 萩尾真佐志

Ш 端 柳子 切角の命したたかに生きて見る

尼崎市

黒川

カラス一羽浪の高さを計ってる 付変更線に雲ばかり飛ぶ

掌をこぼる所詮悲しい星の砂百日をたしかに咲いて百日草

島根県

榊原

君子

飛機で跨ぐロッキーに見た神の雪 米子市 八木

千代

十郎

背かれた矢へ為す術もなく老いぬ ブルドーザー なんとなく異邦で通う国訛り の歯先へ縋りつく蟻で 岡山県 浜野

奇童

公約に総理のはんこ押してない 寝屋川市 江口

度

灯明ゆれ今日の懺悔が終らない

**炉端焼男のぐちを焼いてくれ** 塩満

票が政治の岐路でうろちょろし 大阪市 神谷凡九郎

凡人になるホントウになれるかな此が僕と云える言葉を持ってるか

陽は水を水は陽を溶き四季染める 京都市 都倉 求芽

森脇 善彦 大伽藍公孫樹を散らす屋根の反り

敗戦の将が被っているへの字

テクニック抜群でいて出ぬ人気 和歌山市 松原 寿子

女の海にあなたの素顔澄んでくる振り向いた雲から初春が動くだろう

敏

青森県 五十属探史	母一人娘一人浮世の風の中	え羽織着たはりまんな	倉敷市 藤井 春日	名月を見る看護婦の手を借りて	合歓の木を眠らせにくる隣りの子	爱知県 池田香珠夫	理論に立つ政治と俺は死なないぞ	来女ごころの夢の果て	柏原市 大峠 可動		迷ってる視野から不意に蝶が発つ	岡山県 出原 敬一	ふんわりと受ける姑に歯がたたず	クモの巣を伝うて朝の虹まわる	島根県 小砂 白汀	妻の妬く声は電話のかけ間違い	老いの殼じわじわとじさす不信感	*子市 石垣 花子	又一つ年取る待ったなしの年	初恋の人も夫も先きに逝き	貝塚市 行天 千代	耐えてるを見せまい朝の紅を引く	美しい嘘美しい京言葉	兵庫県 辻 文平	宴果てて庭に落葉の音しきり	秋の果実美味求真を語り合い	大阪市 西出 一栄	出稼ぎが稲の熟れ色聞いてくる	老妻が秋陽の中で胡麻叩く	岛根県 角 耕草
献殼の稲穂刈込む篤農家	倉吉市 田民 碧水	線		岡山市 砂田 静佳	現状は十一月が事始め	二人だけの暮しヘチラシ多すぎる	寝屋川市 柴田恵美子	ロマンスは満洲にあり青春譜	要領と利巧へも一つ大胆さ	倉吉市 奥谷 弘朗	途中下車した考えで病むベッド	ワンマンショウゲストの芸に助けられ	米子市 小西 雄々	若い日の父を端唄の中に知り	まだ牛が啼くふるさとの高い空	島取市 河村 日満	髪梳いてやる薄倖な娘と思い	鶏のごとく絞めたい女あり	東京都 山根 白星	柿ほめて挨拶抜きの久しぶり	来し方をもう振り向かぬ柿をむき	倉敷市 水粉 干翁	下町の気楽さ男が死んでいる	人死んで秋の寒さが置いてある	宮田林市 岩田 美代	モーテルの灯が晩秋に彩を替え	大豆架け屛風にふる里冬支度	岡山市 串田句味地	恐ろしい見幕で集金断られ	集金人民話の里に辿り着く
出雲市	家よりも線路が高くなる工事	唐津市	連綿とした系図の果ての生玉子	伊丹市	頂上に足のない椅子が待って居た	出雲市	口笛で祭壇飾る葬式屋	八尾市	落選の寂しき暮に犬が待つ	唐津市	滝壷の底は極楽かも知れぬ	鳥取県	手さぐりの僕に無かった影法師		夕焼の明日へ続くくつを脱ぎ	別れの日山は真赤な彩を着る	竹原市	留守番が一筆書いて帰る秋	思春期の蟻は木の葉の船に乗り	今治市	本気でやれと本気叱られる	8	大田市	学歴も歳も縮めて同じ趣味	考える車中すとんと寝てしまい	藤井寺市	時雨来ておちつきもどす旅心	泡立草美しけれどこわいのよ	市	豊年の稲穂ずっしり肩に乗り
高橋可保留		岩崎質		樫谷 寿馬		園山栄		大路 美幸		桑原 掬治		和井 観洋		堀江 正朗			古田 鈍舟			矢野 佳雲			藤田軒太楼			中原比呂志			伊藤 静枝	

羽咋市三宅ろ亭	小病院老人ホームをみる如し	唐津市 浜本 義美	裁かれる刻へ蟷螂身構える	羽曳野市 麻野 秋畝	際玄改め	父親の顔を作れと娟へ言い	岡山県 岩道 博友	玄関の花がしおれて妻が病む	岡山県 白岩 文衛	天高く心の肥える秋であれ	鳥取県 清水 一保	あきらめる方の心が勝って寝る	爾山県 二宗 吟平	ストローと遊び話題を持たぬ人	高根市 若柳 潮花	下町で人間人間らしくなる	和歌山市 津田 与史	うとまれているとも知らず子に貢ぎ	大阪市 新川 貞祐	宣誓の手は高々と天を指し	東子市 小山 悠泉	燃えつきていない証に風を待つ	堺 市 高橋干万子	曲終る木馬は思惟の刻を得し	神戸市 来住タカ子	<b>麦洗う指先女の息づかい</b>	室戸市 石建よしみ	がむしゃらに母が走ってるのか保育園	唐津市 新岡回天子	温泉の匂いを浴びる宵の橋
捨ててゆく記憶しずかに雨の中	鳥根県 西村 早苗		和歌山市 福本 英子	手伝う気の孫の目ざわりな赤い爪	鳥取市 北野 天人		八尾市 宮西 弥生	夜の長さ大大阪の恙なし	松江市 黒目 大鳥	化物の正体とも思う色直し	京都市 松川 杜的	人妻に過ぎるくらいの親切も	八戸市 島田 英二	老夫婦の余熱ときどき小競合い	倉敷市 小幡 里風	歯科の椅子へ初手から口をあけて掛け	唐津市 桧垣 岩光	無礼講上役隣りにくる不運	大阪市 白石 潔	祝日に日の丸出せと子も言わず	岡山市 清水金太郎	受験生母の重みを持ち歩き	寝屋川市 稲葉 好子		寝屋川市 宮尾あいき	メッセージ摑みどころのないままに	鳥取県 鈴木村飄子	ひと言を男は臍へ仕舞い込み	和泉市 西岡 洛酔	受賞した菊もやっぱり枯れてきた
一周忌迎えることの早さかな	東大阪市 竹中 綾女	経済大国国連の場で四等国	和歌山市 若宮 武雄	宴つづく国旗夜露に放置され	枚方市 宮川 珠笑		平田市 久家代仕男	引き際の淋しい花道だってある	宝塚市 吉田 笑女	影のある貴男が好きと言う女	岡山県 直原七面山	矢は的に女の力見せて立ち	唐津市 田口 虹汀	続編のドラマを女だから待つ	鳥取市 中森葉士人	合理化の波に善人流される	岡山県 池田 半仙	気取っても案山子はかがし野に果てる	大阪市 北 勝美	トゲーつ抜くに女大げさに	大阪市 欄	柏手の音神様も笑いたい	三重県 坪田 冬花		ばあちゃんばあちゃんトイレもゆっくりさせ			鳥取県 川崎 秋女		

	事なかれ主義でも年金ついている	倉敷市 中津伊勢吉	因習か職別により言葉変え	大阪市 神田	叩き売りこれでしまいとまだつづき	唐津市 山下	6	京都市 山本規不風	復員の船よりさらば十字星	倉敷市 大森	女子大生二〇〇〇CCで御通学	七尾市 松高	老兵は消え失せるのみ火消壷	島取県 但見石花菜	母にボーナス今年もくれるまだ嫁かず	堺 市 伏見	出世する男へ涙邪魔になり	鳥取県 福田	燃える水燃える石持ちなお地球	倉敷市 斎藤	ティーカップの白さ見つめている二人	海南市 牛尾	賀状くれた友訪ねたらすでに亡し	尼崎市 小林	大日本帝国の夢見る有事法	今治市 越智	飯粒が沈んで水を不気味にす	市野呂	一点を守る男について行く	島根県 岩田
春夫		勢吉		秀峰		勝一		不風		登竜		秀峰		花菜		茂美		保子		通風		緑楼		文月		水		右近		三和
麻雀だゴルフだ出世のため習い		贅肉と戦うママの悲壮なり	島根県	求めよ与えられんされど寂しい道だ	今治市	あんなにも変るものかな金持てば	市	妻からの電話で今日は奢る番	爲根県	評判の寡婦にある日が苛酷なり	旭川市	葬列の行きて秋雨悲哀呼び	兵庫県	胃袋の中まで話すお人好し	倉吉市	戯れに妻の白髪を抜いて見る	県	負け犬は敵の死角で吠えつづけ	具市	文化の日皇居は秋のいろに冴え	高槻市	青い海なれば情死も美しい		胃カメラを否ませる咽喉の長いこと	尾鷲市	反省の不徳を謝している孤独	八戸市	合鍵へ悲しい怒りの鍵穴で	倉敷市	生きること教えし女の一周忌
	井上柳五郎		飯塚 虎秋	だ	園部 正則	100	島田 昭治		佐々木 裕		朝倉 大柏		川井 白峯		野中 御前		木村はじめ		山根喜代美		竹内花代子		越村 枯梢	٤	渡辺伊津志		小泉 紫峰		藤原 桜山	
を見据えた作品に、		吟味して戴きたい。	彩平	取らなかったろう。	ら味があった。第一	る。智子さんのは、		上で厳しいしごき		呪文のような重ね言				念的ながら艶冶静弦		新年の第一歩に力佐	(評)明けまし		ガン宣言手術の後		総裁の選挙にかけ		本当と違う類っぺい		応凍え手の獲る寒鮒		は院のボス待つ外方		T 乾杯の録画メニュ.	

と早よ帰ろ た地元民 にキスをする 車護衛つき ておめでとうございます。 の幸福感 ーをアップする 大和郡山市 西宮市 藤後 片山 筒井 森田カズエ 千世子 朴竜 実男

富田林市 中村

(評)明けましておめでとうございます。 (評)明けましておめでとうございます。 (評)明けましておめでとうございます。 (評)明けましておめでとうございます。 (評)明けましておめでとうございます。 (で厳しいしごきをかけたい一人だ。宵明さんの三句ながら艶治静謐で風格がある。路郎先生のを完えるので、強ち概なを握り出したものと云えるので、強ち概なを握り出したものと云えるので、強ち概ながあった。第三句も「階段」でなければら味があった。第三句も「階段」でなければならなかったろう。

。紫香さんの、カラスの句

とする二句組の充実ぶりを

句組だが、正朗さんの境涯

心を打たれた。

路

五美智 郎也子

x

選

手

にの毛のトの春の緞のタがは終地らで毛スは 決 当 毛 でれ買をフ母 ルー に毛様ルモ羊へを泥は料のあ羊じ求たりみ抱 がムエガスは と 1 毛羊還靴 学 111 き起り つ盗気に ら毛布を絵解ドにの暦 が のの手じ求たりみね 学肌き軽んめ羊着にか 我をの出にるで虫毛を 眼渡す 師のたち し 関カ 重すな 断年がた 似慢力重すな断年がをてひ真がり羊け楽だく羊混湯 合すしい重らち始付重解よつ挑行毛登隠歩着のぜか いるルロ病ず鋏客きねりか裸みき品り居きる眼るみ 弘道裕一花柏春代隆大伊古本 どら近貞句博栄 田子 進子梢日男子柏志方棒 マ風祐地友

羊羊ウ羊羊毛ェー玉毛 羊毛 羊毛 羊 I 毛 リー 毛ル 毛 毛 0 0 0 を 伸ひ かさ 温 出 をマ 自 1 羊軸 み天 1 なさに科 0 番着 をわ 羊 来 て舶 0 13 辛で女は 4 to 刈られるさ 天 132 梟 ^ 歳祝の手になまだ 0 0 賭 雪 服 色 だめ持 17 ううが勝 10 12 3 よエ値貧て 塾 な 夢 りゴ札しず 85 ち 3 軒 II 弄 里英重三翁

馬

風詩人車章

郎人二風近仙風魚

太楼

住

彦人

郎友

とぬがずい洗た羊にり な毛牧は意 服とく弾木ウ確安と同じた 服とはなむ綿 | 手見毛しケケ 身信軽けの世せの知 毛過シがめ映羊違う をじくて春にて羊る 包切着見の尽い云罹糸すョ要あえまう むりるる頃したい災玉冬1りいる品札 綾凡茶悠岩勝掬虹右芳通炉満行三ふ保 カ 津 十 女郎人泉光一治汀近仙風斉子有四み夫

曆年十五開開開開振開気善開開家 でが年十選選 年十運運運運向のが最運暦 はら苦あ待兆をもけおな日の買は も年節れつが見ば が明見れる う中ダがまえる が見える 開開ル開ねて嘉次運石だてへ炭 参第足に 2運上団 運運マ運きフ 百の中の がをのや猫ア の元け 来祈雨っほイの年かつを芽下よ っ目たてト山にらま手をのう合 るて開んり湧のな崩ず操開値なわ 筈るきか棚く秋りれきるき段丸せ 潔善天優柳博栄金茶不規右芳通木 Fi.

開

運

珠 笑 選

宮

111

課 題 吟

「運に気・ ・ ・ ・ ・ ・ と まずパチ 開 欲すてた 開運を信 手結逆開運開手開 を婚ら運即運相運 開 ▲を ちって 運 運 開 のそず初 00 0 6 节 は ず初け坂は信時信み 0 絵印 の気 すること 軸無 ゆ日 自 望地 10 兆 付 12 また運じ代 13 1 兆へ今ずいとんだ替え ili 里 得 蓉 すめがだのてじ 74 7 カン 1 社 0 Œ 10 搜 6 2 ら開 ま波開夫易な 運 £ 5 35 温 ++ 瞎 石コでた 1 愛わけ 215 運婦者 想ずるて乗待での 廿 は橋でるい 待人で見 答 # to tis 1 -5 + ま試事気 運え 1 0 妻 0 一歲納 っつ笑灯れ 7 6 をてていがば 戎 7 # to がだし故の 運 かって い歩な ts 3 1 Ħ #T 寝叩て現弱 決開開 く易踏の磨来い合寒 ま出開 h 3 毙 5 る き来場 めけ à る者むにくるるいいかり いるけ 奇茶可本 蔭 A カー方早夕春里御古思素 掬 省 裕度 善 = + 九郎 ズ ズ 身 29 童人住棒エ 工路大苗路日風前方月郎車山 明 醉郎

紙

ж 粉 干 翁 選

くず枚 一紙広証 でいる子 でいる子 でいる子 でいる子 告文 しが へ由を た紙 のみい籍 3.0 を 視 ま /中 いにふくら っと色 おれれは 里 3 さ美 わ ご独にで 裏 白 抜 あ 切り 白 り決僻 を紙 17 のば きら 濃 才走見 75 紙伸張高 ツの占断地気 7 紙深重 12 の瞳 ばす 8 6 b < を一 能 12 h か さた紙る 戻 和主が舞 なす と見 にす 度 紙 6 ts 12 1 かきと 5 す も真うい円 る山ばつ紙 け畑 い祖 b to 1: お 白な喋 b とさけに 但の母紙墨あっ紙る 2 いれ装なれたすしかの人のる白の紙な子の印た出こ るる紙りる h る書な筆形色がい鶴袋る紙ぎち紙す紙 どんたく 重同光道忠方無里英代大勝同古 素潔吟七桜虎登宵 男子三大人風詩男柏美 水身郎 面 人 平山山秋也明

大観

0

怒

0

筆

12

耐

え

紙

水筆紙 3 りげんろ枚 包れ でも 紙紙 を 中 自 も を を か と れ で の 紙 の の 紙 の と と を を を を を か と れ で と と か こ れ で と と か こ れ で と と か こ れ で と か こ れ で と か こ れ で の 紙 に べ と か こ と か こ と か こ で い か こ れ で の 紙 に べ と か こ と か こ で い か こ か こ で い か こ に か こ で い か こ か こ で い か こ い か こ で い か こ い か こ で い か こ い か こ で い か こ つ紙代 手紙の大 に風白き 6 17 ま船さな 来の ぜのヘ字 売 た孫 る虚息で 出母勢を埋 べを ッ待ののか止め ドつ紙嘘なめる 岩奇翁〆芳可同

光童童女仙住

-61 -

干

紙

少

女

0

10

蠑

5

な

3

岩

光

天化

ス

4

1

戻る白紙

心を持つ

7

13

3

里

風

屑

そ

れぞ

n

0

主

張

持

ち

大

柏

かごに紙

辞紙思紙卷

表手に紙の草

で筆にべと

い手え丸に

鼓がすさ母

動ふ輸疑老

聞る血わい

くえ針ずぬ

茶方芳桜優

人大仙山

なのかの

紙

ŧ

n

逆光をいれてヌードの曲線美

前

(逆光にトライするようにラガー飛ぶ)

題 1

仕することは、人間として大いに関心を持つ 活用して、社会のためとか、文化のために奉 べきことだと私は思っている。

っているが、それ等の貴重品を時々は、一般をず対話して、悦に入っている御仁を私は知ぞけて、二時間でも三時間でも、それらと飽 文化的奉仕じゃよと、一度ならず二度ならず つらえて保管、暇さえあれば、家族さえしり 集して、超大型金庫を想わすような一室をし 人に展観して共に楽しみ、和み合うことは、 味プラス財力で、高価な骨董品などを蒐

とを唯一の生き甲斐と心得えている。鑑賞す 若きも子供にも、 すら彼個人だけで楽しんでござる。 進言するが、彼は取り上げてくれない。 でない部屋にところ狭しどころか天井にま きコケシを万を数えるほど蒐集して、 またも一人の友人は、いい齢をして、愛す 隣り近所はもとより、 差別なく鑑賞してもらうこ 老いも 金庫 逆流の津波樋門をつき破る 恩がらせ逆手に取ったつもりら 逆なこと言うてウィンク見て欲しい 逆縁の亡き娘へ野菊手折りけり 逆光で近づく女神音もなく 性格をかえるすべなく逆光線 反逆児母は裏木戸開けて待 (逆算で齢ばらし合い笑い合い (舌は逆目が本心を言うている) (恩着せて逆手を取った貌でいる (逆光を連れた女神に愛匂う) 反逆児へ裏木戸開けて待つ母で (ウインクが逆だ逆だと云うている)

逆光をまともにラガーのトライする ており、生き甲斐としている。 である。川柳も後者に属すべきものだと私は 謙虚に善用活用を実行している愛すべき存在 者は宝の善用、活用を知らない。後者は まない。まことに温いムード とき心和み、 川柳を善用活用することにつとめ ほ 0 ばのとし である 7

逆もまた真だと客呼ぶ叩き売り 人生を逆転させた当りくじ 親の意志逆く子供がめしをぬき 逆算でお齢がばれた大笑い 逆境の女が選んだ夜の蝶 急流に逆らう鮎にある誇り (親の意に逆い今日も箸とらず) (逆光で生かしたヌードの曲線美 同同利 司 同 御

美

和

同

強がりが心と逆のことを言う

(逆境に耐えるその目が澄んでいる)

逆境に堪えて瞳が澄んでいる

幸

(逆境に鍛えた年輪底光る

逆境にきたえた努力光り出し

(逆もまた真が通らぬのも人生)

同茂 美

逆風に向う呼吸を整える

静 佳

> 主治医の薬へ逆うアレルギー 逆なでの言葉に狂う腹 一と言腹の虫狂う M M M M の虫

同同無

逆らって見たもののどうなるもので 左側を歩く流れに逆らえず 開発に逆い古墳が顔を出し それからの女が逆に誘い出す (逆ってみたが頑固に歯がたたず (開発に逆うように古墳の貌

逆もまた真そんな理屈にまどわされ 逆流に乗り出す若さ讃えよう どたん場で逆転人柄認められ もう定年逆転劇のない生活 逆流を上るさかなを見習らわず (定年せまる逆転劇はないもの (流れに逆らう魚にはなるまいぞ) か 同同翁 同 童

保 同夫

橋立を逆さに見れば天に伸び 良港を目指し逆流へ船を漕ぐ (深呼吸して逆風に立ち向う 良港を目指そう逆流ものとせず (虚勢の舌こころと逆に動いてる) 良港を目指そう逆浪かわさねば 同瓢

太

逆戻りしたのに用件度忘れし

7もご参加く (19 10分) /徳	定員50名(申込順)他社の方もご参加くだ 定員50名(申込順)他社の方もご参加くだ をは、18時55分)/大阪空港(19時30分) を島	分青(11) / / 楼時	(9時)   / 厚本公園 (2寺の) で句会・宴会) 道後温泉 (20日8時3) (20日8時3)   / 道後温泉 (20日8時3)   / 日4時頃・1   / 日4   / 日4   / 日4   / 日4   / 日4   / 日4     / 日4   日4	がた。 (港 (21時40 11時40) (11時40)	サイム山港 (8 寺5 ナ) / 川食「ハト」川柳塔本社親睦吟行会(主催・川柳塔新緑・四国の旅
	よろしく	同日	へ明日の虹を信じよ	同	の残り逆転狙ってみ
	本年もどうぞ	司子	て呼び上がった過去	H Ti	らさも印ってる半主記)
	<b>7</b> 71	喜力追	超る見ては非要の気	н	逆吊りて以に目でも豊く
九一三四	1県倉敷市下津井一	司气味地	日かある雲の流れに逆ら	F	(逆転勝ちそんなつき合いだってある)
表	漕——月2日締切(3月		用意な投げを逆手に寄り切	ij	等三 寺こは 景三 こ ~ こ ~ ) コマネチの 逆立 ち世界の 目を集め)
		同	逆風も試練と帆綱たしかめる	同	のコマネチ世界に渦巻かせ
同	叱ったら逆に部下らに慕われる	露杖	て店の		ねじの種を探して反抗期
同	逆探知したのが妻が嘘見抜く		(逆風にまかせ柳の護身術)		じを巻く子に育ち不
柳五郎	心と逆な言葉を吐い	同	逆風になびいて柳身を護る	同	じを食わす子育つ家庭不和
同	つもり円をド		で再起の種を拾		立ちの目が絶景を見つけ
同	折角の土産が逆輸のジャパン製	同	の中で	静枝	
貞	腕立ててへばり逆立ちでは転び		逆境に怯まず母は立		(逆ねじを食わせ私腹を太らせる)
同	逆転があるから人生面白い	同	に怯むことなく母強し	同	じを食わせて腹満たし
ック同	逆さまに着てるのでないニュール		の本能四季それぞれへ逆		いて
慶	逆転ヘッキとは怖いものと知り	善四郎	四季に咲く花は自然に逆らわず	同	をして歩きますどうかな
同	教		(逆転の涙に霞む茜雲)		(逆ろうてみる手で腹を読んでいる)
同	逆らえぬ風に向って吠えるだけ	同	逆転の涙へ映る茜雲	回	逆うて見て相手の腹が読め
紀久子	要領を知って父には逆らわず		(逆戻りするふるさとの風凍る)		(逆賊の烙印押されて顔が売れ)
同	へ女の海を失わ	同	逆戻りきめた故郷の風が凍む	頼次	が故に名前売り
同	逆風をうけて女に炎えるもの		(逆境を生き抜いた老父の目が温い)		(まばたきも忘れて逆転祈ったに)
寿		英子	逆境を生きぬいてきた父の背	同	逆転の期待空しくゲームセット
	逆転の戦果振り返えり振り返えり		(逆風の無情にわが道はばまれる)		(逆浪へ丸に紀の字のど根性)
同	逆発想を云う若者の明日の道	同	逆風がわが道故意にさえぎって		逆に巻く波へ紀
-	新仮名づかい逆に孫から教えられ		(半生の九回裏の逆転劇)	同	逆巻く海へ文左度胸の船を出す
H	えまり くったしまるスターを力し		シュとしろ 一大車名す。オナー		

## 大

### 萬 III 柳

## 入選発表

投句総数 二百九十四 JII 村 句句郎

儲からぬ計算しまいに腹が立ち 箕 面 一本杉

年金も数え定年考える 大 洲 暁 明 大阪 子 計算のドルにとまどう旅財布 そろばんを捨てて仕事に誇りもつ 計算通りふえない預金高 大 阪 満津子 代

お隣りの生活を計る趣味を持ち 炉 露 杖 計算はあなたまかせのネオン街 震度五も計算にある基礎工事 重 信 人

得票を見て計算の甘さ知る 計算は早いが金に縁がなし 二次会の酔いをさました計算書 Щ 静 佳 仙

計算で添うて計算で別れ和歌山

寿子

通じ合う計算ひとつに溶けてゆく

富田林 花

梢

斎

奈良 カズエ

苦労みな背負う母の計算機

ボースナは計算してるうちが花 お小言も計算に入れ借りに行き 繭 秋

さりげなく胸算をしてつまむ鮓

朗

計算に弱い親父は怒鳴るだけ

岡山たけ志

計算が何処で狂ったか平社員

大阪

あいき

計算づくの倒産とは知らず計算の出来る財産たかが知れ 岡山 金太郎 買う方が原価計算して値切り 笑

計算に無かった不況の大嵐 計算の答は意地など認めない 界 天 計算づくの媚にほんほん入れあげる半額セールつづけて計算合うている 宝塚静

計算のうとさ善人かも知れぬ 揉み手しながらソロバン弾く胸 恋すすむもう計算のない二人

計算をした手みやげを用意する 筋を歩いて計算考えぬ

計算のミスに気付かぬ盲判 その先を計算今日は負けてやる

H

人生の縮図電卓へ割り切れず 大柏

立候補握手の数も票に入れ 泉

計算をしながら人間死んでゆく 抱き上げた母 計算のない両手

昭和五十三年度

九八七六五四三二 静和武好美憲幸千花 ベストテン(最終回 代梢 t 一七、五 八、五 0 富田林 堺

Ŧ, 五.

Ξį

Ħ.

阪

和歌山

和歌山

取

Ξ 恵 凡 素 露 美 太 身 子 郎 郎 杖 Ξ 筒百静 どんたく 泉子雄一幸祐 四 II. 11 II, 四 四

Ŧi, 五.

塚

取 敷 官

尻尾ふる猫の打算を笑えない

祐

計算はぬきの友情温ったかい地ノ句 静

取 泉

天ノ句

二一 方本里天 大棒風笑 000 000 Ŧi 倉 奈 愈 下略 敷 良敷 投句 先 油回 = 一句以 内 二月二十五

〒59堺市堀上 緑町

藤井一二三方大萬川

=== 柳係

時: 場 大 萬 ( 昭和54年2月25日 萬(大阪市阿倍野区 日

松崎町三丁目

슾

昭和

敢 準 梅 里

傍島静 馬 一 花 千 代 梢

第二十

六回

大萬川

柳

大

会

賞 賞

特別賞

賞

日

五十四年度第二回

三句以内 一月二十五

締切

日

会

蓉

Ŧi.

百円

柳開司 会

の 슾

話辞

柳宏子 鬼遊

ストテンご招待懇

中 島生々庵

度べ ス 1 八木千代選 藤岡花梢選 テン表彰

れ 西山

宛へ送って下さい。

の上、二月二十二

日までに左記

各題別々に柳箋または便箋に投句だけの方は郵券二百円封

選に記入

梅原憲祐選 、路美幸選

投句先592

大阪府高石市

高 村

師

浜三丁

Ŧi.

Ш

郎

台田 発

水席題

兼昭 和五十三年 が意り

焼鳥」

二題 周囲

席題

飛田好一、

雄

閉

0 辞

会

三句以内 酔

若宮武

後援 主催

川大

JII

社会

追っ句 新 年 K

おめでとう会

月二十八日(日)

二時

から

なる。 催されるが、地方の参事・理事の方々もお気 つぎの常任理事会は二月も三月も2日で ますが、ふるってご参加のほどを。 拝借したいと思います) 軽にご参加ください。 潮花・ 大阪周辺の方々には往復ハガキを差し上げ 新春役員懇親宴が今年も心斎橋の大成閣 . 正本水客・戸田古方・児島与呂志 大坂形水・島居百酒・西尾栞・中島生 黒川紫香・本多柳志・阿萬萬的 板尾岳人・ 不二 本社発展の 田 三夫 お知恵も 称西若 す 6

夫序にん | 句が大 中集三阪

-島生々庵主幹/編集―不二田一三次を出す。うれしい話です。 |十二年間奉職の足を洗う定退記念||市の足―交通局川柳部の与呂志さ

発行所

JII

柳

塔

社

会 大丸百貨店の間を東へ五分 月二十日までに本社へお申込みください 四千円。 (地方役員の方はハガキで

別掲予告のように定員五十名なの

で、

お

申

四国吟行が五月十八日~二十日ときまる。

こみは早目に鬼遊・岳人まで。

児島

与呂志

著

柳句

集

与呂

志

六月七日本社句

숲

0

理事会とあって盛会。

条件の悪い日

だっ

たが納

8

て発表。

まり、六月七日の本社句会が刊行記念句会と見島与呂志氏の句集は「与呂志」と題もき

常任が

H

柳

塔

社

常

任

理

事

会

12

月

4

集を出される。第二句集で若本多久志氏が喜寿記念

第二句集である。

詳 15

細は追 日

会場は

南区心斎

橋・大成閣(そごう百貨店と

(6月

### N H K 111 柳 募 集

投句 課 **〒** 540 ガキに三句以内 新しい NHK近畿本部 大阪市東区馬場町 篇切·一月十日 川村 好郎選 「老後をたの 好郎

く 五分・ラジオ第一放送一月二十七日(土)午 (土) 午前 (全国 の時間 (全国放

発

老後をたのしく」



26日に母校佐世保中学の創 だきたいものである。11月 健康の秘訣を巻頭言にいた はますますお元気である。 稿締切毎月末 ・小石ご夫妻 女・薫風・凡九郎・重人・ 敏・寿馬・美幸・柳宏子・ 放映。本社から、栞・小松 社)月の子・新子自選集 ▼現代川柳選1(たいまつ 勝美・鬼遊の諸氏出席。 8Fに集まる人、五八〇氏 会場の大阪コクサイホテル の盛会。NHKテレビでも

島生々魔

で開催。地方の役員諸氏も 二時から、心斎橋の大成閣 は一月二十八日(日)午後 立70周年記念式典に参列さ (参事·理事·常任理事 役員 新年 4 振替・東京4・24362 区百人町一の二三の一四一 祈ります。 康不調とのこと。ご自愛を 柳人記「森田茗人一東野大 売中。発行所 八」は好読物。最近氏は健 ▼柳宴12月号「へそ曲がり 東京都新宿

▼川柳塔社の

話に著者操子さんが涙ぐむ 加、盛会。生々庵主幹の柳 行記念句会は た高橋操子著「千亀利」刊 美しい場面が印象的であっ のロイヤル宮殿で開催され ▼昨秋11月23日、岸和田市 ご出席ください。 百三十名参 ジは圧巻。四百円〒共。 「現代川柳と松本芳味の位 一河野春三」堂々18ペー

ら-11月は本社の投句をサ

また頑張り

共に五百枚ずつです。

·傍島静馬氏

(宝塚市)か

▼番傘創立70年記念全国川 大会で生々庵主幹は「岸

本社副理事長)が喜寿記念

本多久志氏 (西宮市· ▽同人の動向△

> ますと。 ボりましたが、

・嘉数千代香さんは

(6月15日)に句集を刊行さ

久志良·恵二朗氏古稀一

岡山県歳末川柳大会の

味追悼号」となっている。▼「縄」第8号は「松本芳 定価千五百円。書店でも発 が注目を浴びて発刊された 演された(53年11月19日 ためにもノレンを制作中で I しく」。またライオンズの する川柳手拭を作りました 長として献血奉仕者へ進呈 から一児島献血協力会理事 ▼本田恵二朗氏 選に文に大わらわである。 読んで」を執筆。最近は新 いつつ―近江砂人川柳集を 番傘12月号へ 文集になるようである。 が、川柳塔創刊いらいの句 うな句集になるかは不明だ る。まだ具体的にはどのよ 康を気づかってのことであ 集を依頼されたのは氏が健 合は編集部の お好きな氏が、こんどの場 ・橘高薫風氏(豊中市)は 二句集である。 「血を棒げ合う友愛の美 ・雑誌などの依頼が多く 「句は禅と思 (倉敷市) 本作りの

## 直原玉青先生 (青玲社)

### 大画業を見学する会 洲本・千福寺の大襖絵ほ

か

11時55分洲本着。ここで玉青先生ご一行と合流。 年会を兼ねた集い。 帰りは逆コース。16時15分発~18時34分ナン 月二十一日(日)午前10時15分ナンバ発。 厚玉青先生の大阪文化・芸術賞受賞の祝賀と新 (宴会は一時半ごろ 午前 15

洲本・千福寺の襖絵は四間二面という玉青先生の

大作ほか、襖絵、小品等多数の力作を見学。 日帰りは一万円。ご一泊は四千円追加。 (どな

たでもご参加ください) 九、阿萬萬的 お問い合わせは〒598泉佐野市中庄一〇八一の (電話0724・63・4112

氏が出席。 は十 ▼落合思月氏 一月十五日に老人クラ 曆 ・祝賀句会で第 薫風 大阪 ·岳人面 市

掌

岳詩 拝受。 5 ▼植村客遊子氏(姫路市)か のとと。 紅月諸氏の寄せ書もお ·越山·葉香·白溪子 カニ食い吟行のお便り (喜風氏報

入院。

しかし経

過 れ、

心は良好と

右半身が痺

急きよ

ブの

しそう。 藤井一二三氏 市 this

の出席者で盛会でし 一舟氏の人柄を偲 H細は客 が昨 てい 館 12 大阪線八尾下車南 (水)夕6時から・ 酔うて漫歩するー (八尾神社境内) 7 >句会△ 山代の湯の香 は10 近鉄 西郷会 路。 В .

遊子氏が次号に執筆。・

新

X

紹

介

古

谷

節

水

·小松園

推

施 夫 年十一月2

H

(F

庫

原

を開催

日、

故城一

柳会は十一月十二

5

っます。

A

福

田丁路氏 V

旅

ぶ多数

宛町北一 に毎各題 気。 投句 雅号記名。 母適当な句箋に合題五句以内)は 切は当日 先〒581八尾市高安 丁目一五 題 到着分限 投句各 記記入。 兼 大路美幸 り。 句

内で開催 わたし・金利 から―南海電鉄川柳会は18日六 題は -日本髪

金沢から山代温泉へ来 鉄永和駅南スグ) 常 丁目大萬で開催。 -央公民館2Fで開催 日午後六時から東 80 午後六時から一 東大阪川柳同好会 南大阪川柳会 柳福引あり ・ファイト 題 紙 . 昇る 20日 偲 題は一目 松崎町三 兼題は 大阪市 は二十 近 7 GOL

祈る・ 入る。 案内 会費三百円。 郵券百円同封 . 多い ・席短兼 裏面

(脚领)

### 肉体疲労時の ミンB、補給に

☆筋肉痛・肩こり・腰痛・神経痛の緩和に to ☆アリナミンA25ミリ錠のほかに5ミリ錠



### 本 社十二月句会

会 場 金 属 会 館

七 H 午 後 六 胡

許い ばむほどの暖かさだが、 よ 53 年 度のさよなら句会であ P はり 70 名を割

うの 黒川紫香氏の柳話は「心のふれあい」といたのも、時節だな、とおもったことである。 子さんの句集「千亀利」が同時発売されていさんの句集「月の子」と、本社発行の高橋操 そういえば本社句会で、現代川柳の時実新子雑」時代を知る者には嘘のような話である。 な文字が現代の辞書にあるか、どうか た。今後は選者の交流があるとか、うれしい 1 て、心あたたまるお話だった。 なじ 番傘 がテーマだった。「心のふれ みに 先生が、人の心をつかむことに スも聞かれ なっ to かっての「 たつお氏 い ささむ あい」こん 番傘」「川 す 出 妙を得 席を得 は 別と か h

> 的 れ ろい。 へ着き、 のようであった。 H 、帰途も犬が 旅行先きで犬に誘導されて目 案内役になった話な 日 間映 うの 0 興 がおも 行 をさ

出席一 今月の月間賞杯は笠原 受付・児島与呂志・玉 雅風・与呂志・重人・与史・恵美子 行·西田柳宏子— 吸 金置重人・ 記録・高杉鬼遊。 塩満 敏

さむ・雀踊子・凡九郎・涼一・酔々・弥生・文秋・喜風・萬的・みずほ・寿美子・栞・い文秋・喜風・萬的・みずほ・寿美子・栞・いき、一三夫・柳宏子・綾女・三十四・トメ子・小三夫・柳宏子・武雄・夕花・幸・水客・英子 薫風 鬼遊・美幸・岳人・潮花・紫香・百酒・勝美き・吸江・宇宙太・たつお・生々庵・定男・き・吸江・宇宙太・たつお・生々庵・定男・き・吸江・宇宙大・だつお・生々庵・定男・ · 庸佑 · 小松園 ·鎮彦 ·葉子。

### 題 「ボーナス」 板尾 둆 人選

ホボ ボボボボボボ 1 ス 1 1 1 1 1 1 テナ ナスの ナスの半端でくぐる縄のれんナスの半端でくぐる縄のれんナスはないから迷う事もなしナスはないから迷う事もなしナスが決まると若者動きだす ナ ナ ナナナ ナ アスの隙間ひろがる が出たぞブランは練ってある 引き算ばかりする夫婦 ひろがるボ あ る戦さ 1 ナス期 涼君 重文 鬼幸与与废滋 一子 人秋 遊生史志 雀

> ボー ボー

ナス斗争女房も家で旗をふり

蘭

1

0 から

ことと思うが、

古い書類から明治三十九年

酒

の量はとやかく言うなボー

ナス日

7

たことから話が始まった。

ス

1

(の家に生まれたことは、もうご存知ってがないので多くは書けないが、氏

ボーナスをゆっくり数えているばやいたら齢だとボーナス学毛皮にはとてもとどかぬボーボーナスの封を切るまで威鳴 ボー ボー サラ金の海へボーナス吸い込ま 社長には仏滅というボー ナスを一ぺんもろうて見たい父 ナスを腹巻きに入れ父帰る ナスをゆつくり数えているゆとり ナス笑い出 ナス 1 張らせる 日 ナスで れ

ボーナスも退職金も取っ \* ボー ボー 真直ぐに帰る奴吞む奴ボーナス日 ボーナスを貰って一職さがす目をボー ボーナスは 阿呆くさいものに他人のボー いくさにも勝てるボーナス裏切られボーナスのない芸人が旅を行く î 安を出てボーナスを考える ナスを貰って裏切り考える がす目をボーナスの記事が刺ナスは妻の入歯にもってかれ テスの端数はその日に飲むお金・ ナスを懐にコーヒーのんで ナスでわが家の水甕八分目 って嫁き -ナス呟いた むおる日でいる 一栞三 水 水 萬鬼水夕美定一規涼君度美雅幸英 夕 客花的遊客花幸男夫風一子 幸風 子 恵美子 百美 酒幸

磁野 いさむ選

値

切られたギャラにも耐えたカムバック

い滋

雀

も途切れ手術の控え室

さむ

人気の落ちた作家稿料値切られる

高杉 遊

わず雑談

雑談をする秒針のない時計 雑談がとても好きなにぎり飯 雑兵の雑談社長は聴きたがり 雑談の本音は菓子の折りが言 雑談へ口べた笑うのに回 ぶれ 談の中へ本音がひとつ落ち が揃

===

秋

寡婦ひとり小声で値切る風の中値切ったらまける相手が恐くなる 労働の汗も時には値切られる 漬物を値切るおんなを愛すべし ええ格好値切らず妻に笑われる 旅先きで大阪人が値切る蟹

太滋 重美水鬼岳雅敏幸栞 度 茂 津 雀 人幸客遊 人風

切られたコケシ小さくすねている が泣きまっせという値切りよう

値切ったらあかんダイヤに叱られる

雑談の穴場だんだんおもろなり

3

客

53

年

度

月間賞杯永久保持

重

雀 第 幸

職人の意地は値切られてから曲り

芒穂の雑談となる草干里 雑談と言えぬ言葉をつい喋り 雑談の中心再婚した女 雑談へ本気がひとりいて狂う 雑談の中であっさり殺される 言いたいこと言うて雑談から離れ 雑談を聞かねば注文貰えな 雑談に無視されている腕時計 金持ちの雑談炎えるものがない 雑談で終り借金切り出 わいわいと五百羅漢の念仏会 刑務所を出ると雑談したくなる とりとめのないおしゃべりへ日が落ちる 日溜りを追ってたわいのない話 北浜を沸かす総理の無駄ばなし 臨時ニュース雑談一つときしんとす での雑談からだの事ばかり へ紅一点の低い鼻 へ靴下こげる句 せず U 一三 史 与一弥 三 夫 生 水 涼綾静〆夕弥吸枯岳涼 

二月「演出

「金髪」

値ぎるだけ値切ったブーツ履くと雨

千万子

恵美子

現金を積んできびしい値をつける 俄雨こうもり傘は値切れない 陽は落ちる値切り上手な市場篭 欠陥住宅かもしれぬ値切ってあるさか 何となく値切り何となく買わされる

た酔涼古つお々一方

木枯しのせいか値切って見たくなる好きなひとそばにいるから値切らない

酔弥滋

しのせいか値切って見たくなる

値切ってる父の背なから見た夜店 値切って買って一人暮らしに無駄が出

値ぶみひとつ出来ない男が値切る

正札を値切る女の顔となり

定 千万子 花

一女馬女花生江梢人

九月月 七月 六月 五月 四月

瓦

生々庵

いつも値切る人には見えずベレー 通訳に値切ってもらう旅の恥 弁護士を立てて慰謝料値切らせる なんとなく芦屋マダムに値切られる 値切ってる妻を他人の顔で待ち

たつお

酔

たつお

度

ッケが好きな女で値切らない

登美也

ベルショ 雑談のデザートに出る艶ばな 雑談の一人嫌煙権を持つ 題 帽今日も雑談してかえり

停電 鬼涼栞千万子

児島与呂志選

停電 停電にコタツ冷めとうなってくる停電へ足が乱れた定期券 停電が短かくつまらない顔する二人 オフィスの停電一瞬スリルめき へ電話の声が大きなり 恵美子 静 雀踊子 寿美子 馬

### ぬ独走ぶりは見事でした。(有信新之助) 決定した感があり、 九月句会で三回獲得の大路美幸氏に 大路美幸氏にきまる

×

三月「ちぐはぐ 断然他をよせつけ 笠津菊大正宮辻川大西 路尾路 原田沢路本西 小美水弥文好美 松工史園幸客生平郎幸栞幸々

天牌になったところで停電し切換停電だんねと宿直茶をすする停電の圏でど忘れ思いだし 停電の夜老! 停電の夜老! 親と子の対話に技巧などいらぬ技巧派と言われ仲間の外にいる技巧では最後のつめにおつつか ☆字読む指停電にたじろがずッちだけ停電ヒューズがとんb電へ月が一層冴えて見え 電に点滴のテンポだけ静か間の停電暗を作るビル間の停電暗を作るビル ーキキャンドル停電用にしまっ隣りも消えて停電ホッとする近所も消えているかと窓をあけ 巧派と言われ仲間の外にい近では最後のつめにおつつ通夜にその一言が効いてく 1 一の終止符停電するようにへ電話のベルのけたたま 12 に落付い 十三階は高すぎる なるとその 1 0 1 ちょっ 壇役に立つところ 0 停電子の手握りし 眼 とそのまま寝るひりのテンポだけ静か 既だけ 活を賭けた指の技巧っと武蔵をまねてみる が光ってる んつつかいてくる しまっ 80 とり 6 蔥 17 17 3 静枯幸優 馬梢郎 ~ 弘 的 選 過去語る言葉巧みに騙される 遊転も選挙の技巧かもめている 逆転も選挙の技巧かもめている 逆転も選挙の技巧かもめている を一つ持てば技巧などはない のでは、 の 技巧派で食いサングラス手離さず残り火を抱いてる女にある技巧夜の技巧こらして他人の顔で出るあーうーも話術の技巧記者会見 天平の技巧が光る秘仏展テレビかぶれかデートも技 大坂より素朴な味で売れる技巧など忘れ ただ単 プラト 雑草になんの技巧も 石庭 鶴千羽技巧をこえて 四 11 の技巧を探せば る言葉巧みに騙されるナー騎手の技巧が生きてくる に生きてくだけに ニク言葉 の中に の技巧まだ尽きず ある も機 ない強さ いる折 トトも技 れる土 きか いる技巧 プラス 消え 药 的 する 弥 英 太 凡 滋 美 茂 九 滋 美 生 子 津 郎 雀 幸 滋美太茂津 三十 柳 吸栞柳

「四 技巧は言わず埴輪の出来不出来 を 先人の技巧に驚く出土品 先人の技巧に驚く出土品 を 生鳥りの人を飽かせぬ技巧もつ を ま鳥りの人を飽かせぬ技巧もつ 処で技巧をちらと見せまい世間にしてくらす いのも技巧

2

宏子

小小松園

萬水綾一与凡涼 三呂九 的客女夫志郎一 登美 他 栄梢

**物心ついてまぶたの母を知り** ドセル背負ってパパのないのを 育ち 知 h 水 規 寿 弥 客 風 子 生 洋君 みー一静 敏 百 敏 重 〆 弘 ずニ三 敏子ほ三夫馬 酒 人女生 どんたく 幸優太郎

n 0

物心つく頃瞼の母となり物心ついて大きい方を取り物心ついて大きい方を取り物心で表える朝の靴をはく新世帯物心二つの支援うけ物心に恵まれているとは他人のなることで物心ともに満たされる。

恵にあわてる子の

心の奉仕と神はおだて上げ、利益とお賽銭とが折合わず

れてに

知ったは庶

(保も) に民の子

ランドセル背負ってパパのないのを 物心のきはじめてより背かれる 物心つきはじめてより背かれる ものである。 りから左利き である。 りかのではじめてより背かれる

も物

から先頭

ゆずら

0

物心ついた頃から人見知り 物心ついたら欲しくなる宝 物心ついて少女は星に泣く キャンバスは白どう色つける物心 物心母の泪を見てしまい 物心ついた時から女好き 物心そろそろ仮面ほしくなり 貰い子の戸籍に怖い物心 物ごころもう家元を継ぐ毛並み 物心過去がだんだん冴えてくる 物心付く頃からのひくい鼻 物ごとろついて振り子が動き出す 施設の児おぼろな母を赤く画く 愛情が そろそろわかり膝 つかぬ内から仕込まれる

たつお 千定 滋潮 万 男 雀 花 与呂志 生々庵 千小幸潮 万 路 花 岳

物心両面女はさすがに行届物心ついたか急に黙りだし 物心父の二号の膝 心両面女はさすがに行届き

小吸栞 松 園江

整理)

静 水

水夫夫

ぼろかすに言う宿敵も妻はほめ 悲しみに馴れた笑顔に隙がない 産声を聞き母親となる笑顔 コマーシャル用の笑顔だってあ b 静 静節節

10月句会で失名の句は左の二氏でした。 河井庸佑 .

V

なかなかの司会主役をこきおろし 水

雅号ぶっちゃけばなし 代に輝次と改名、標札にも出し得意然 とし てい まし 地区を頭に付けた特別の呼名にしているため、 三名いて、東京の照二、広島のてるじ、 にしています。 頂き、輝次を捨て、三度目の変名、兼雅号として大切 戸籍通りにならざるを得なかった経歴があり、 三十年頃、 国鉄川柳人の全国大会に出席しますと、 (176)を照市で過し、 浜田久米雄先生に雅号を照路と名付けて 12 商業に入り、 一ですが、親の因果か小学生 卒業証書までもらったの 先生にごつう叱られて 岡山の照路と 同じ雅号が かすみ 青年時

路

る

ゆ

行

そうな私に、同僚からハッパをかけられています。

国鉄職員

五十四歲

吉

神燈の提灯に伝統が生きている 柳化粧 各地 柳 壇 追 加

味噌汁の野菜もベランダ作っている下取りもきかずお医者に身をまかせこれだけは話を変えてお茶にする サンドイッチマンおどけた顔に憂いあり寿風時刻表通り帰ったハネムーン 越山 間われる犬に最後の飯をやり 秋月 利増煙の提灯に伝統が生きている 紅月 裏口へ廻って恋の目線合う 古くさい十八番がうけて もう一人の女へ女鏡みる 寸て 朝山千世子報 美代子 客岳葉奮永実 遊 子詩香水楽男

母となる一瞬神の力借る 奥の手は出さず静かに去って行く 奥さんの趣味の手芸に弟子が出来 書道家は綺麗に力抜いて書き 中年に奥の手がある禁臘区 胸の奥のぞかれたくないよく喋り 灰血へ一気に悲恋ねじり消し いじめっ子どこか不憫な影を持ち 坊さんも煙にむせる奥の院 奥行きの計り知れない眸持つ 力では嫁に敵わぬ姑の鼻 時計だけ動いて過去は戻らない 通夜に来て初めて通る奥座敷 利品のようにバーゲンの品見せる 一人壺が一つの奥座敷 の間に通され秘密うち明ける にはけっしてしない胸のきず 西宮北口句会 所に湯気たてる 静正め泉 馬祐る女 喜久甫 総 甲甫山馬馬祐 甫

百号に立ちました。 謹んで「わかやま」も

川柳わかやま吟社一同

頌

ほ

カン

百

春

本年もどうぞよろしく

## たけはら川柳会

〒725 竹原市竹原町田中・山内静水方・たけはら川柳会

### 新 979 • 春

Ш 吉 吉 中 1: 端 村 村 村 林 辰 12 南 民 加 次郎 け 風 郎 雄 L 仙 林 深 辻 庄 宫 日 可 遠 春 É 世 佳 2 1光子 界人 ず 栄 生: ほ 林 林 島 古 高 崎 野 橋 美智子 裕 富 幸 Ł 志子 子 代 デ 古 富 清 高 西 木 田 野 橋 村 静 智 芳 2 喜 芳 子 5 子 郎 植 高 神 浅 大 野 Ш 橋 藤 島 武 操 歌 0 干 ん子

代

岸和田市土生町一九八九の八電0724・22・0049 岸 和 田 JII 柳 会 同 人 同

助

子

子

596

らびに同懇親宴へ多大なご支援をたま わりまして厚く御礼申しあげます。 本年もよろしくご指導のほどお願 川柳句集「千亀利」刊行記念句会な

操 子

高

橋

申しあげます。

-85-

'79 あ ま 大 す る 頒 萬 < な ベ に 9 ろ JII 春 JII JII 111 柳 柳 柳 柳 会 会 会 会

明けましておめでとうございます

季 節 料 理 · 折 詰





大阪市阿倍野区松崎町 TEL (623) 5031・5032 南区畳屋町三ツ寺センター TEL (211) 9 1 8 4

書。締切毎月末着便まで。21行以内。 七字以内の句に、下三マスに雅号。

かならず原稿用紙にペン書きで文字は

お得意へ信用の橋掛りかけ さな秋みつけた蛙橋をとび 目に合うて親父のありがたさ マンめざすは彼方の金門橋 双眼鏡を離さない ケー JII 柳 大坂 形水報

F V

1 I ースに 工 ス

オ

痛くとも耐えねばならぬ椅子にいる みどり 入弥栄形聖千博前大一野洋幸亜 郎仙生 地夢泉田山念生々坊成 水 III

菜の花句会

高杉

たぬきでは天下を取れぬ世となり

父の手の痛さを思い出している

痛

ı

い歯を押えながらも食べる秋 い目で覚えた仕事出来違う

> レポー レポー 悪魔には一番いやな夜が明ける 弱虫の悪魔刃ものを持ちたがり 大阪弁の悪魔につい気を許す 悪魔にもなれぬ弱さが駅で 花嫁の トの ルもう トへ主張も少し入れて 一字一字にある祈り 道 あけ い婿である てある

危ないと予感不渡り摑まされ危ないと思う予感はよう当り温い手に抱き起こされた七転び 借りるめどついた電話が弾み まだ若さがあるから握手がこそばゆ 花嫁に負ける姑になれまし めどはまだ立たず立退きせまられる 結局は犠牲の上にめどをつけ 幸福をつかむこの手が節くれる 出

鬼遊報 凡綾勝滋加女美雀 柳宏子 文柳 闡 思 君 智度誓 喜恒憲弘涼静 子秋信 風

バーゲンで買い馴れている素早い手 レポートのテーマにされた内輪も

お

3

終りまで読まず週刊誌は置き去りに 美与子 みずほ 頂留子 勝 度

ええお好みどすなと如才ない言葉 円描いて年の初めがやって来る 映画ほど静かではない恋終る

日

めての孫ではるばる母がくる もみなふところに持つ終りの

金儲け伊予狸から教えられ 恋人が出来た狸でもう化けず 古狸滅多な事で怒らない アワダチ草増え遊び場のない 権力の座につきたがる大狸 流行が早いで狸も困り果て 先代から店を守ってきた狸 総裁選裏で糸引く古狸

狸

近道

をして境内でけつまずき

竜宮で幇間つとめる章魚おどり お好みは大阪人の顔で喰べ 境内を貸して神主だらくする

鏡にしたまくうるさ型

中川

証明書 これだけが愛の証明抱いてやる 野性の証明女叩かれた痕を見 年寄りの生甲斐足の向く芝居 生きている証明年金課へ送り 私を証明する定期券にある疲れ 芝居より女の方が気にかかり 責任をもつとは男の芝居です 階段へ来て見失うかたつむり ひも 猿芝居の猿ではないぞ男だぞ あすもし プロポーズ芝居のように出ぬセリ よりどりの人生なれど道一 切られ役絆創膏を持っている 告白の言葉どこか芝居めき 蛸すでに仲間外れを意識する 境内で拾う小銭は神のもの 茹でられた蛸愛嬌を失わず ダムに売る段々畑の亡父の汗 終る頃になって目をあくコンサー 毒舌の男にほし んたが 、間の証明祈りに明け暮れる 0 8 っぱい秋をかついで陽が沈む する筆先ほのかに罪 波ゆれて野崎の船が出る どんぐり川柳会 から つきの ハンコうすいのきたない 塔の 大将砂丘の上は青空だ あわせ星が証明してく 女の話終わりけ マイホームとは蛸 の味方をすると決 いたこの 包 5 松川 知らず め れる 0 垣 フ 1

杜的報 史好報 小松園 雅吸サ吐真勝鬼岳 小松園 栞弥酔 芽代 H 風 風江 ョ来砂美游 人生郎幸祐 花遊葉生子 K

古徳利宿の主は話好き しっとりと和服が似合う京美、ミス京都十年前を恋しがる おばあちゃんが弾けば縫い糸ピンと鳴り 赤とんぼが好きふる里のおばあちゃん 吾が手相しあわせを信じよう 女には過ぎた気骨を惜しがられ 還らない限り戦っている遺骨 わかれ道からは淋しい雨となりライバルの傘で時雨を避けている 秋霖へ一つ一つの愚痴を溜め 昂ぶりを押さえ時雨に濡れるまま ウインドゥ見入る女は活きている 不便には触れず故郷を持 古い傷愛の深さが触れさせず 白骨になっても女の方を向き いたわりに触れてしずかに燃えてく もう 中にかすりが似合う京美人しく生まれ祇園の水に合い 夫恋今宵の月が欠けてゆく い足りぬそんな気がして回りングラス家の近くへ来てはず 姉妹誰かにあげる卵抱く の夜は触れ合う心確める のある奴だったのが先に逝き ビ出演その真ん中におばあちゃん 合うた心或る日の へ触れず呼吸を合せてる 列車待つ母さんの迎 柳わかやま トゲである 誇り い傘 津 道 与 一史報 三天雀踊 白杜和誠佳美芳 渓 子的友史子穂子 英和太茂 子子津 万紫潮水飛客遊的香花客鳥子 武 姓子 的香花客

凡九郎夫 千寿子 小松園 女

ふる里は心の中で抱く口姉と呼ぶ女の多き嫁ぎ先

マン

大安の日まで育てて熨斗をつけ

り年の柿はひし

ずも川柳会

大安の神話の里に鶴が舞う

と呼ぶ女の多き嫁ぎ先

歌山七面句

富公 まさ子

詰

ふる里の道広くなり近くなり

れずにいる茶の

不器用 ゲーム狂夫に昼も夜も無い看板の裏でささやく計算機 人生のゲームセットにない拍手大切な命をゲームにかじられる男も女もゲームが好きで結婚す 看板と異った顔でする商 看板の重さを二代目やっと知り 嫁ぐ日の道具 人生のゲームへ足が縺れだし 表より裏看板が繁昌 なゲー へ幸せ詰めてゆく ムで泥を吐いている

武雀大冬はじむ雄子輪花む

或る日の姉に目をそらす 中筋 一幸報 フクョ ワ 也史 子カ

ふる里に都会育ちが嫁に来るアベックの或る日の姉に目を

肩落とす背なからむごい事言えず

ぼる手に開拓の汗を秘め

スリッパの音を待ち

緑二弘幸勇民す華十善渓 楼郎生 太代れ水郎彦水 としよ 相槌を打って子供の意志に乗り 道筋の野菊地蔵に手向けける道筋のポスター必勝の顔で立ち 表札の裏で指揮棒ふる女 立前と態度のちがう未亡人 気丈な姉も白髪老が見え 故郷はダム底となり初時雨 ふる里に立てば過ぎにし五十 表札に家の重みがのしかかり この家も表札としより後に書き 表札は昔よかったままの位 ふる里は山見るところ海も見る あーんだと受話器の声の変りよう 川柳ささやま 悪い事 h 年 河原

国境の橋はきびしくにらみ合うアベックへ嬉しい丸木橋がある吊橋の揺れるふれあい残す里

|来て昔話が一つ消え

JII

川上

八輪報

看板の自信をゆする風が吹く 倒産の店に看板大きすぎ 笹舟を流して渡る丸木橋 誘惑に負けて危い橋渡り

タバコ屋の看板有害とは書かず

空白を

たまま

好緑光

郎楼代

(事と知り夢には触れぬ電話口) 古を埋めきれないでいる遺骨

伝統のお囃子守る子供たち 実力のある人態と隅選び 宴席は隅で銚子が空になり 隅っこに居てもわりあてみな同じ 子供の眼大人の艫につきささる 子供奪い合うて他人になる家裁 一ト言がハガキの隅で愛に満ち められた隅に鼠の瞳がキレ めく小さい玉 板垣 1 みのる報 草丘報 越 文 白近

み房無素 のる子聖水 千代子 み蚊虎 のる声秋 房無素しげ 子聖水尾 よし 靖子 可ゆう也 三光世周秀勇和輝 多賀子 百合子 Ш 江. 子 巫 幸治津穂雄次美夫 0

惜しまれるうちが花だと御長命肩書きのない末席が派手に飲み 餇 重秘秘奥 大会社社長は秘書に踊らされ お気にいりの 女秘書社長の心読んだ感 屈 格子戸に柿しぶ今も塗る老父 どの子にも故里詰めて柿送る 宣伝に釣られた名所の拍 理屈 犬の秘書によまれた美人歌手 書作る時間通りに動く 役も秘書に 書をつけてお里 别 報語読みの娘が のがやはりよかった惜の様上げ嫉妬の目で眺 の落目たたりを気に が来てると秘書 に引き金引 一人ほし たたりへ一目おい で 鞄に六法全書持つ 社用旅行 やっぱり社長が肩叩く 海電鉄川 て頭を下げるコツを知り 言居士が「を張り 秘書を通せば無理 いと思う忙がしさ 目お 手を惜 柳部 it の女秘書 P へ帰ります 别 D 動く知事 い適令期 めとく背 (大阪市) 子抜け し出し て返事 まれ ボス島 い柄 80 3 がきき 0 する 丸 与区 2

北報

緑之助

軒太楼

綾勝圭宏摩 天 女美水子郎

III

与東綾勝圭

三秀 志報 維久子水 風

> 合理化はもう間近です鉄の願いごと叶うにする 雑誌記者雑学だけじゃ世に出ないタレントの甘え小さな穴に落ち 古米など俺は知らぬと稔る秋ぬるま湯を出て外気の寒さ知 ぎょうさんの願い 合理化の不安今宵も酔えぬ酒 朝夕の涼し サファイアの化粧が冴えて秋動く 合理化の波悠々自適とも成らず 代の職にも努力忍と耐え いごと叶うに神の嘘を見 から 0 一怒哀 さリンドウ蘇えり ど定年 楽の職場去 され へ丸い百度石 でる たテー かのサ 百度 る 知る え 聞 石 3

可保

留

流

IE.

IF.

九夢

醉郎

孝独河車

仙南楽

む月

以外

迎えられ

5 つり

の破片

むっつりな顔阪神が負けている腕の立つ職人あまりしゃべらな 人に言える楽も苦労もある別居不渡りをつかんで血圧高くなる 涅槃仏父の ごろ寝する眼に天井が問い モンタージュこりやかなわんと自首する気 善人がつくれば美人のモンター ああ軍歌ごろ寝の夢の草枕 先達の合図にごろ寝起される 圧計買って神経尖がらせる東大阪川柳同好会 を気づかう妻 ごろ寝に変りなし が袖 を引き 下べらない かける 斎藤二 30 三十

3

ツェ

柳

四報 与呂志 德晃佳眉笑洛希久加 加志水風酔志 一風風遊郎 風 水志 史文 74 巣

三尺の髪さ

ぬ妻である

進め進めとラッパ

逃 げ道 で を を 探な 貼 すい 紙 す 里 のに 向 Ш さて 浅く て遷 3 にいが T < ない さ すい なた 、なる

助 溪善九河寿栞鬼幸好恒 水彦老南馬 遊生一洋

L る旅る

る n

佳 句 地 10 選 前月号から

コオロギの鳴くしかとある大地りんどうの忘れ形見のように咲く 女ことばが炎えている 拾うよな 節政不鈍紫洋蘭文笑静 之 夫己朽舟光祐幸晴子水 居雀鎮翠度古報踊 子彦公

十春がく

勿

体な

い水の流れ

7

墳

慕

0

地

川柳たけはら

嫁 ſΠ

か

せた寂しさ背にあるごろ が気になる歳の作業服

寝

羽根のない蟻よ遠いみちのりぞ

Fi.

+

坂見えて仕事の残りすぎ

いの鉄音 わらせ

凛と冴え

懐晦晦お明逆職ふふふス し日日ふ日境安れれれキ 真母企ま生娘の ふ子ふふ蜜れ供れれ蜂 男付ひ倖好 懐しい父にふれあう遺作展晦日そば今年も母の味を賞め晦日そば今年も母の味を賞め ただ笑 境も 坂悔 みが 婦仲子が作文に盛り上げる 疎の村力仕事に堪える父 川柳塔まつえ に しい父にふれあう遺作展 部 ts 0 あ ああ あ あ の城 親 が北川柳会 いいも事 夢明 やし泪や 11 いも い子にひと色欠けた虹の 消 い疲 陽 屋 17 H も事によりけりラッシュアワールの手のひら温し恋ごころいっプ忘れて寒い子が育ち 孫に 親子 に私の殻が溶けてくる 歩けば して 日 だまり明日を信じたしも何時しか恋にかわりゆ えて 足れ の太陽信じとり や訪 7 りない家の 頼 マンネリ化 りない家の灯が円い概れる人を見失い 江口紅 仮 描 は見せまじき いて神経 いなバ あう日 ばり父より母が 石に 面 をうすく引く も生きる汗 0 蹤 重 てる月見草 して倦怠期 が汗 い子が育ち ラ な つまずき 0 狗 棘を 時日そば 知 彩 13

右 満 道 近子子

弘生報

鬼

0

としよ

若き日の

紅喜報 洸四斉み生子

とがりための

も月にほださ

3 3

心の

※養老院の窓、養老院の窓

老夫婦

にめの努力も負は和目と目が動き車 たる心めの努

動き事

が足 7 無視 れ

とは

紋付は母の 出来すぎの子があり金策考える出来すぎの子があり金策考える出来すぎの子があり金策考える。 力仕事 出来すぎて常識はずれる人も 出来すぎた嫁で姑の鼻高 一件外の大 ーラで 0 口奇事 7 た今 語りぐさ 一日の夫婦は 10 あ

仲 3

与みみ祥虎軒三巡 根のつ ころり秋楼和歩

合おお

の英鬼一松貞菁 小敬か房ばら詩焼路緑子居愛子子子

手を入れぬ着物を亡妻の形見と 上直が過ぎて左遷と言う悲哀 正直が過ぎて左遷と言う悲哀 が情より新幹線と云う魅力 か情より新幹線と云う魅力 が情より新幹線と云う魅力 が情より新幹線と云う魅力 誰が為生きる自己 なやっても日・ はやっても日・ はやっても日・ ともんでせっぱつまった友が来る 登 はの恋文あせて箱の中 ともんでせっぱつまった友が来る 登 みなやっても出たがる甚六で つきの悲しさ吞んだ鮎を吐 問に胸乾く き 弘朗報 常泉宗千民重生甫則子子 叮孤鶴 登美也 アキミ

生甫則

元の吸殻蹴って時間待ちらい日晴着の躾糸を抜くしい日晴着の躾糸を抜くしい日晴着の躾糸を抜く

うちこんだ仕

事に

時間忘れ

テルミ

星きくみ

弘御独寿寿雄自早紫小俊 々然苗泉生子 朗前歩朗湖

れ

3

あ国心ラむ対長く道臓イつ話考

故お本門郷し心口 暗へホットニュー! ない味さんまと共にない味さんまと共にないまと共にないまと は P 見送 心べ喉 問 ベベ柳 気から覗くに出っ りが 思わ にが かできた子が育ち トニュースが味を活せ地へ先きに着き いある言葉 が相手 せずし 編口岡 脚物をほどから間山市) サーバー の傷に どとしゃ いってくる 弾み 味を添え 触れた悔 ゃべり いぬき かか合い かかせるい かかけい すみ 0 H 柳

から

二丸

紅

きたりを聞いて祝儀の中を替え 一人を包む陽が笑い まで 祝儀袋が気にかかり 関案を提げて実家へ行く はたという焦り はたという焦り はたという焦り 聞袋 高きたがり 話をする 12 和

香報 笑吟盛 美 人子湖宏水子王月桜

ひ宏幽秋久正柳 3 大谷月雄道郎 照梁孝佐胡昌加二二 廉恒鮫博 郎 党を表現を 路太柳恵風吾

-90 -

言い足りぬことは港の灯が包む 残り火があるからこんなに鼓動うつ 残り火があるからこんなに鼓動うつ 残り火があるからこんなに鼓動うつ で発見舞う言葉のひとつひとつ選る 不治見舞う言葉のひとつひとつ選る スナッ 旅先で 欠席の驢考えながら歯を磨く とりとめ 救急車迎え夜更けの手術 ハナット ナッ 一吹が 気よい " 次会はスナックにする女連 分に分けても兄弟見比 本の煙草も分けた戦中 たきり +1 靴揃える妻にある期待 を探せば鈴の ットつるべ落としに秋包む クへわ の明日へ残す戦中派 失意の 去る風景に土があり D クに来てまで儲け話し クへ今日はお連れの違う人 噂スナックよくはやり 柳 山 マン 話半分嘘も 0 高 臓霧の中でも 0 が恋の匂いをして焼ける ない会話から答出る 10 拾った娘が帰 夜を深くする ざと肩書呼んでみる 音がする h 聞く 竹 to 松風報 日由貞洋豊 満香山々生 源雄熊葉士夫人生人 虹 美和子 とし江 久宣麗秋松海青 岳白其節 幸恭静 陽水梅 江長子翠風州果恵一子子野 マッ 追う子等をからかうように鳩が飛び躍進へ現場の声が活きている 平和論鳩はとぼけた顔でいる マッサージ手古摺るほどに 鳩笛の土産父さん吹かされ マッサージ機械にまかすかわ生ぶ声に取越苦労などはない 足 呼び込みのうまさにうっかり 花道のない人生に鳩はこず 7 暗黒の岬悩を吸う如し 羊毛は緬羊なりと説いてあ休刊日昨日の記事を精読し 休刊日昨日の記事を精読し宮仕え紙一枚の浮き沈み ある女十年経てば名を忘れ人間の証明ビキニ臍 (へそ 歯科椅子へ初手から口をあげて掛け 限りある宅地空へも伸びきれず 矢は的に女の力見せて立ち 落選の寂しき暮は犬が待ち ッサー 女ぶる女も居っ り上げてもらえぬ声が発酵 いため鳩ベランダにうずくまる の声 の声 サー 三井ケ丘川柳会 UIII 家族の声が入れ替り ハなき声 雑音にされている ジ機械にまかすかわいた世 身ぐるみ ジ手より口かずよくはずみ ジ師きれいな女の の励まされ 剝い て座がはずみ (へそ) 6 奉仕する 師る 底力 財布出し h 高田 を見せ す 肌 回天子報 博泉報

亜也子生 てまり 正面子 三千子

えらすぎて親は一人でほ追伸のその一行にある温

つとか 3

れ

のデモも集まる城の前

は P 71

2

2 ス

> 声のんで見つめるゴール半馬身祖母ちゃんの肩に小遣いつまってる鳩が去るころ子は、 失明の公式を踏むマッサー 傘持たぬ雨 ファンファーレ鳩は出番を知って 田毎で鳴く蛙 いる

五の方方

日寝

川柳会

義勝岩実

吉竿美一光

故

城

舟氏追

生鍬を振る

悼句会) 珠惠亜右一度博 美 笑子鈍近菁 泉 報

舟を偲ぶ句会の古馴染 城 あ邦小好 松 睛園郎 つ凡勝東川酔美乙 き九 きの美雲子々女 柳宏子和 雀 天郎 踊子 秋 × 一子園

13

母偲ぶ形見の帯をきつうし 偲ばれる個性を遺児は持ってな 秋晴れへ一句が浮かぶもずの声 城だけが有名になる我が故郷 起重機もなかった頃の城の一箱庭の城にも大手門がある

8

江留美

琴晴

よしひろ

権力を振るわぬ城の美

しさ

逝った子を偲べば乳房張

ってくる

天平の昔を偲ぶ古都の鐘あの時の思い出偲ぶ車窓拭

武弘勝

好

回虹掏篏春

安 子 汀 治

ちっぽけな城の主はひる寝する おもかげをしっかり抱いて寡婦貧乏ゆすり一城の主夢見てる

0

過去を持つ女ひとりの城に人る

石

### • 募 集。

水川 字は楷書で新かなづかいにしてくださ 陽 題 染 煙 柳 稿は四百字詰 女 吟 帖 抄 塔 光 (各題 3 10 10 句 句 句 5 原稿用 句以 太 JII 高 橘 īE. 四 紙  $\mathbb{H}$ 端 橋 本 尾 に四枚以内。 良 柳 幸 瀌 水 代 風 栞

文 選 選選 選 選 ★用紙はなるべく柳箋をご使用くださ ★川柳塔欄の投句は本社同 課 愛 水川 すく 新 題 染 煙 柳 塔 帖 抄 すく 顔 各題5句以 3 10 10 句 句 句 関 若 橘 JII 若 内 村 鶴 本 人に限 美 好 35 武 薫 りま 子 風 郎 由 す 選 選 選 選 選 選

### 常任理事会は2月2日 5時から

昭昭 一半年年 和和 定 印発標 五五. 刷行集 十十四三 分分 価 阪市南区観谷中之町二〇番 所 人兼 話大阪・二七 报替口座 年年 四二 四 南区緩谷中之町二〇番 111 藤 中 干干 百 号 大阪・三三三六八番 月月 原島 11 五 円 5 百 百 一一三九八五番 4 -五日印刷 料29 2 円(送料共) 円(送料共) 円 社 社 郎

## 本社新年句会

会 席 兼

費題

円題

当日

三月号

発

表

1

月15

日

締

兀

月号

発

表

2

月 15

締

切

会 日

場時

4

後六時

公公あ 「気 53 年度 日本 (ひ) 「 京会 (の) 」 「 京会 短い 冊交 3 つじ 換会 月 間

題

廊 月 電話 271 会 日 X 艇 谷

発表 賞 杯 人三点以内) 授 与と全出 西川正橋

尾村本高

内 栞 郎 客 風 彰 厳

守選選選選

好水薰

271 長堀 東 3 9 車 3 10 東ス 5 グ地

★電話での投句や訂正はご遠慮願います 大阪市南区最谷中之町20

者

表

JII 柳 塔

社

2月の兼題

5月7日(月)

[突如] 横

無礼 迷路

### 本 社 句 会

月8日(月) 6時 2月 7日(水) 3月7日(水) 4月6日(金) 6時

6 時 11 6 時 11 11

6 時

から

11

11

11

11

11

任理事会

2月2日(金) 5時 3月2日(金) 5時

4月4日(水) 5 時 5月4日(金) 5 時

> ☆誌代が切れると送本 を中止します

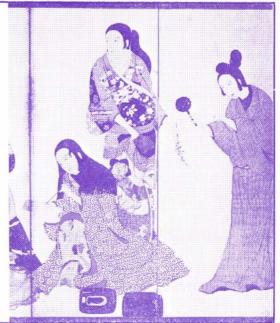
# 美の殿堂

平城京をめぐる山々を一望の 静かな環境にある大和文華館 日本建築の特色に近代美 を生かした美術の殿堂です 収蔵品も日本・中国を中心に 国宝・重要文化財を含む 数のコレクションです

観覧時間…10時~17時

▶近鉄奈良線 学園前駅すぐ

## 近鉄



の年1 ★大相撲は一年六場所 でドラマをくりかえす れけだが、われわれは 十二場所で、それに近 いドラマをくりかえし しいにあるでヤヤヤがつづ 援のほど、お願い申し ★本年もよろしくご支 すございます。 あげます。

てなくなっ 近びにも

★ 大会 は は いっと かっと と が され 最 生 で に 住 む 中 の は と いっ ら で と な ら べ に の の だ が され 最 生 と が い 一 近 所 の 中 か と が され 最 生 と が が れ 最 生 と が が れ 最 生 と が が れ 最 生 と が が れ 最 生 と が が れ 最 生 と が が れ 最 生 と が が れ 最 生 と が が れ 最 生 と が が れ 最 生 と が が れ 最 生 と が が れ 最 生 と が が れ 最 生 と が が れ 最 生 と が が れ 最 生 と が が れ 最 生 と が が れ 最 生 と が が れ 最 生 と が が か は し き り で な ら な に い ら な ら い た に は し か が る ら し と き か か る と き か か る と き か か る と き か か る と き か か る と き か か る と き か か る に な ら し と か か る に な ら い も こ か か る に な ら い も こ か か る に な ら い も こ か か る に な ら い も こ か か る に な ら い も こ か か る に な ら い も こ か か る に か か る に な ら い も こ か か る に な ら い も こ か か る に な ら い も こ か か る に か か る に か か る に か か る に か か る に か か る に か る に か る に か る に か る に か る に か る に か か る に

であ

毎年も記念句集二つ 今年も記念句集二つ ★若本多久志氏の『喜 毎月15日』と、児 おっだが、良い行集を作 うだが、良い行集を作 がたけるよ

ad

[ii]

第三種郵便物認可

一部 大阪市北区中之島三 三(朝日)

(投稿 先)

要機秀何には掲載紙をお送り致

柳・俳句・短歌を明示 毎週月・木曜日 三(朝日新聞ヒル内) 毎週水・土曜 投稿随時·自由課題

宮内庁御用達 菊正宗酒造株式会社 神戸・灘・御影

## 投稿欄案內

柳

橘

吉

薫

風

句

者 1/1

者 信夫

短

何過火・金曜 II:

よい酒

大阪市北区中ノ島。

(朝日新聞ビル内

東京本社

波

新

聞

社

111 111

1X

区川

酒

酒

雑誌 05703-1